

JKなのに
援交してるなんて...

困った子だ...ペロシ

数時間前

男は何歳からオジサンになるんだろ？

厚生○働省の資料によると

15歳から29歳までは『青年』 30歳から44歳が『壮年』
45歳から64歳が『中年』だそうだ

では29歳の俺がオジサンではないかと…
難しい所だ

それは俺がすでにバツイチで…

普段から特定の人物に

オジサン呼ばわりされているから…かもしれない

そんな俺が何の仕事をしているかといえば…
とある大企業の社長秘書だ

とはいえそれは縁故採用による所が大きいのだが…
無論努力もしているし
今では相応の実力も付いてきたと自負している

そして今夜は大きな契約を踏まえた重要な接待がある
物事を円滑に進める為には食事や酒を共にし
場合によっては女性をあてがってやる事も必要なのだ

ただし…ウチの社長は穴主義で
先方が『女性』を望む接待は全部俺に丸投げしてくる
とはいえそんな仕事も秘書の勤めだと諦めているが…

ところが困ったコトに…

今夜の客はかなり『若い』女性がお好みらしい

いわゆる『JK』だ

まあJKの意味が何なのかはお察しだが…自分の娘とかわらぬ歳の女性に手を出すとは…正直ドン引きだ

そうした時に俺は
とある超高級デートクラブを使つてみたところ

いわゆるセレブ専用：JKも身元のハッキリした
アイドル並の美少女ばかりという高級店で
あくまでホテルの二室で『お話し』するだけという体裁だ

ただし…客とJKが個人的に『仲良く』なってしまった場合はまた別の話でいわゆる『援助』を前提とした交際というアシな関係に早変わりだ

もつともJK達も割り切ったモノで…

金銭はもちろん将来へのツテやコネ目的の場合も多く故に読者モデルやアイドル予備軍の娘達も所属している

ただまいったのは…俺もそのJK達との
『お話し』に参加する事になってしまった「ト」…

そこへいっしょには——



「な…なんで貴方がここに…?」

「はい? いいえ…初めましてですよ?
私は『イチゴ』といます♪ 宜しくお願いしますね?
おじさま♡」



他のJK達に混じって現れたその女性
いや少女は…

俺が秘書として勤める社長の一人娘
如月綾(きづらぎあや)…



そして14年前：
初めて出逢ったあの日から

俺の事を『おじさま』と呼び慕ってくれた少女だった



お嬢じやないわ……

ちゅっ♡
イチゴよ？



1
時間前

片親だった父が病気で亡くなったのは…
俺が高校受験を控えていた中学3年生の頃だった…

そんな時…

親の他に身寄りがなかった俺を救ってくれたのは…
父の親友であった如月社長だった

社長は俺を『家族』として如月家に迎え入れてくれ：
その上大学までの進学費用を負担してくれた大恩人だ
そんな社長の恩に報いるべくとにかく俺は猛勉強した

大学で経済と経営を学び社長の下で働くに
相応しい男になろうと必死に…ひたすら努力した：
その甲斐あつて今の俺は如月社長の筆頭秘書となつた

一時ではあるが社長は俺を養子にして…
自分の跡を継がせようとしていたが…
それは俺が断った

社長にはれっきとした粒種の実子が居たし
むしろ俺はその実子が社長の跡を継ぐ際の
手助けになりたいと願った

そして…如月家は奥様が武家の出という事もあり
育児・教育は家臣の仕事であること知り…俺は家庭教師を
名乗り出て正に全身全霊をもってその教育にあたった

実子…人娘である彼女はそんな俺に懐いてくれた
ただ…歳の離れた俺の事を『お兄ちゃん』ではなく
『おじさま』と呼ぶ事には少々抵抗があつたが…

そっ…その社長の実子で…
彼女如月綾(きさらぎあや)…
俺の生徒にして歳の離れた妹分…



そしてなにより問題なのは――

「お嬢…」

どうしてお嬢がデートクラブなんかにいるんですか!？」



「あら？ 私は『イチゴ』ですよ？ おじさま♡
それに…今はまだ接待中なのでしょう？
大きな声は控えた方がよろしいのではなくて？」

「むう…」

確かに…自社の社長令嬢がデートクラブにいました
などと騒ぎ立ててるわけにもいかず俺は押し黙る

「あら…怖いお顔♡

少しお酒でも召し上がったら如何かしら?」



「…では頂きますが…後で時間を頂きますように…
しっかりと『お話し』したい事がありますので」



「うふふ…何のお話かしら？
あら…お酒も来た様ですし…乾杯しましょうか♡」

「あなたはお酒はダメです」

若い女性のアルコール摂取はなにかと高リスクです
女性ホルモンはアルコールの分解を妨げるケースが



「はいはい」

そんな事もあるうかと 私の分はソフトドリンクですよ

おじさま♡」

「…なら結構では」

「ええ 2人の出会いに…乾杯♡」



そんな茶番劇のしばらく後…
俺は意識を失った…

「……………」
（知らない天井だ…）
そごごはどごだ？…うてイタタ…

「おじさまっ
目が醒めたのね!？」



「…お嬢？」

「こは…うう イタタ…」

「…こはホテルのベッドルームで
おじさまがお酒に酩酊してから 1時間程経っているわ」



「うう…おかしいな…あれほどの酒で…ううっ!?
それにまだ接待が…」

「おおじさまの接待相手は…別の女の子を連れて
スイートへ移ったわ…その後の手配は
但野さんがしてくれたから問題は無いはず…よっ…」

「…伯野が？」

伯野は俺の部下で…今回のデートクラブを手配してくれた男だだが何故ヤツが…？

「そして…ごめんなさいおじさまが酩酊したのは…私がお酒に服盛ったからです…」

「なっ…なんぐそんな「ト」を…」

「ごめんなさいっ…ちよつと酔いが回りやすくなる
程度のお薬と聞いていたのだけど…
おじさまには効きが良すぎたみたいで…」



「はあ…というか色々腑に落ちましたよ…
今回お嬢を手引きしたのは但野のヤツですね？
いや…お嬢が但野にムリヤリネジ込んだ…ですか？」

「はい…その通りです…」めんなさい」

「まったく…どつしたつて言っんですか…
デートクラブなんて名乗ってはいませんが…
ここはいゆる売春宿ですよ？「冗談にも程が」

「じよ…冗談なんかじゃないわ！
わっ私は…その本気なもの！」

「本気…？」

いいですか？ お嬢それこそ几談にも程があります
社長令嬢であるあなたが父親の部下である私を――」

「ええ…そうよ好きなの…
ずっとずっと…好きだったのよう！
それが悪いコトなのかしら!?」



「お…お嬢？」

「それこそおじさまは…私の初恋の人で…
今でもずっと想い続けている相手なのよ！
なのに…あんな女と結婚するなんて…」



「…『あんな女』でも一時期は私の妻だったんです
誹謗中傷は止めてください」

「なによっ おじさまという夫がいながら…
ホストに入れ込んだ挙げ句…
おじさまを棄てて 海外に逃げちやう様な女!」



「…彼女も甘やかされて育った社長令嬢ですからね
私のような小言の多い男は苦手だったのでしょう」



「…どうせおじさまだつて…お父様の顔を潰さない為に
あの縁談を受けたんでしょ!? おかげで…
おじさまの戸籍にバツイチが付いてしまったわ!」

「それでも…あなたの父如月社長は…私の事を想ってあの縁談を進めてくれたんですよ…とはいえその嫁があそこまで尻軽だったのは想定外でしたが」



「どうせ先方も『娘も結婚すれば少しは落ち着く』程度に考えていたのではなくて？ それにおじさまは高学歴で仕事も出来るし…その格好良いし…」

「まあ…彼女が私をさう言う目で見ていた事は
否めませんがね…とはいえ彼女が本当に求めていた
相手は…とにかく甘やかしてくれる夫だった様ですが」

「むう 同じ社長令嬢でも…
私は甘やかされた記憶がほとんどないのだけどう？」

「ええ…そこは私が厳しくお育てしましたからね
その厳しく育てた私の生徒がデートクラブで
援交JKをしていたのは正直ショックでしたが」



「ふんっ 私だつて…
家庭教師がデートクラブを使つてゐるなんて…
ショックも良いところだわ!」

「お嬢…これは仕事接待なんですから——」



「あら？ 私だつてお仕事よう？『毎2個』…
すなわち15000×2の3万円で身体を売る
援交JKのお仕事よ♡」

「どっでそんな専門用語を…今の学校の『学友』ですか？
あそこは偏差値も低くお嬢にはふさわしくないと
あれほど——」

「おじさま？ それこそ私の友人達なのよ？
誹謗中傷は止めて頂戴」

「失礼しましたが」

「ですが…じゃないわ!?
私はずっとずっと…おじさまが好きだったのに…
あんな女と結婚しちゃうし!?」

「…お嬢」

「ええ！ おじさまが恩人である私の父に
義理立てしてしているのはよく判つてゐるわ！
だから私を…大事に思つていてくれている事も！」



「…でしたら——」

ばっ

「ならっこうするしかないじゃない!?
そう…ここにいるのは社長令嬢の『綾』じゃない…
ただの援交JKの『イチゴ』なのよっ!」

「…!?」

「んちゅ♡ちゅ…ねえお願いよお…
おじさまのモノになれないのなら…
せめて『イチゴ』として抱いて頂戴…んちゅ♡」

ちゅ♡
ちゅ♡

「お…お嬢…」

「お嬢じゃないわ…ちゅっ♡イチゴよ？
それに…敬語はやめて
ちゅ♡お願い…おじさまあ」

ちゅっ
ちゅっ

判りましーいや判った
ここにいるのは如月のお嬢じゃなくて…
ただの援交JK…そーいう事だな?」

「ギャー♡
ギャー♡」

「えっ? ええ…その通りよう? んんっ!?」

「くちゅ…ちゅるっ…なら遠慮は要らないな
こはひとつ…小賢しい手管を使う小生意気なJKに
しつかりお仕置きをしないとなあ…んちゅ♡」

「んちゅ♡
ハッ♡」

「んんんっ!? ぷはっ!? な…なにコレ…
おじさまの舌が…んちゅるっ!? あ…あひっ♡
やあ…そんなトコ…あひいっ♡」

「それでもその手の経験は…風俗のお姉さん達相手に
積んでいてね…クチュ♡おやおや!…ずいぶんと
感度が良いんだねえ? イチ「ちゃん♡」

「イ
チ
ちゃん♡」

「あふ♡くちゅ…ちゅ♡らめ…え♡あひ♡
はぐき…ぷろぷろわっている…♡あ♡あ♡あ♡
ら…め♡」

「ああ…もじと感じ…じと覺？ちゆっ♡
力を抜いて…俺に身を預けて？
ちゆっ…ふふ「イイ」だ可愛いわ…「イチャ」♡」

ひびく

「んんん…♡ら…らめえ♡
あひつ♡あつあつんんんっ!」

「おっと…キスだけでイっちゃったか…
滅茶苦茶敏感なんだな…イチゴちゃんは♡
じゃあ…これに懲りて少しは大人しく—」

セクッ
セクッ

「あ…あらあら…あら…おじやまが…
きもちよくなつてないわ…」

「おじよ——イチゴ…」

「そ…それにおしおきなら…
もつとわらひを痛くしなさいよ…!!?
ま…膜だつておじさまの為に
残つてるんだからあ♡」

セクッ
セクッ

「イチゴ…」

判ったよイチゴの処女…俺が貰うからな？」

「イチゴ♡
ハハ♡」

「ああ…嬉しい♡」

「おじさま…おじさま♡んちゅ♡」

もちろんこれが

ただの茶番だと言っ事は重々承知しているぞして…
大義ある社長への恩はひとときも忘れた事はない…

ぐちゃ♡
ー♡
ハ♡

それでも…

華奢な身体で必死になつて俺にしがみつく彼女が
俺は愛おしくて堪らなかつた…



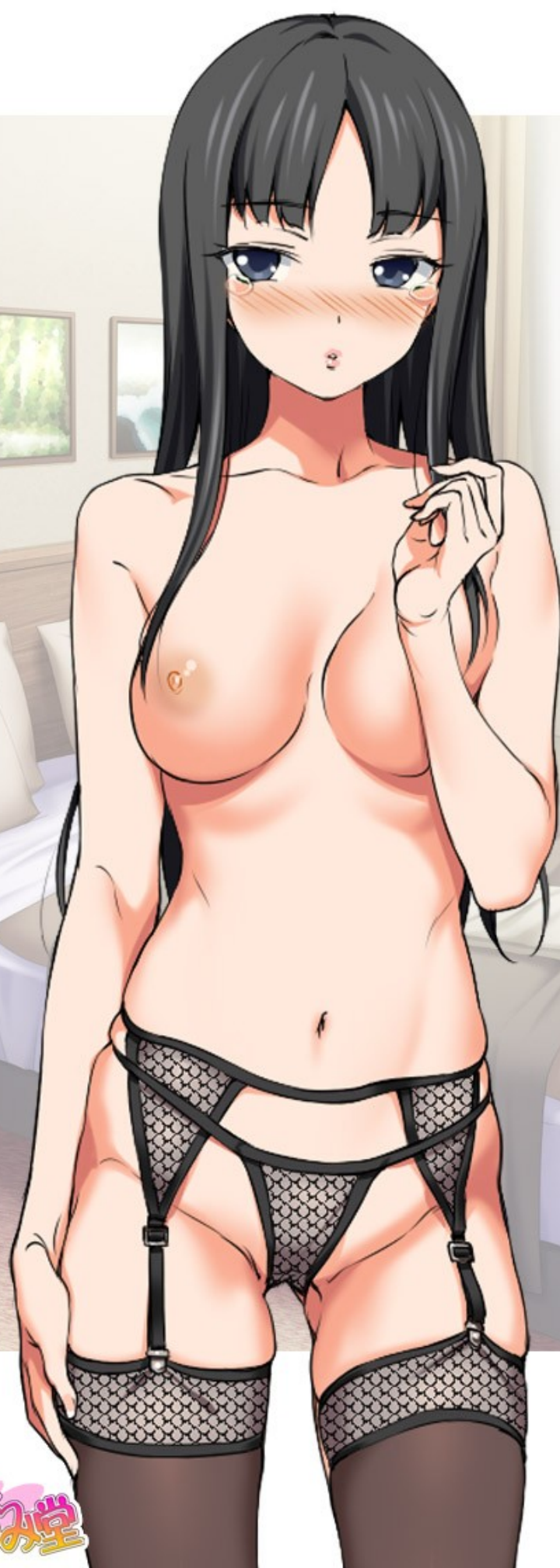
オマンコお
キモチ：パイの♡

あぁっ
おじやあ♡

数分前



「はあ…はあ♡…おじさまあ♡
これが大人のキス…なの?」



「ああ…お嬢にはちよつと刺激が強かったかな？
ちゅっ」

「あ♡」

「おじさまったら…私は援交JKの『イチゴ』よ？
お嬢なんて呼んでも…返事なんてしないんだから」



「イチゴ…ね判ったよ…ちゅっ」
(まあ…確かに歳の離れた妹の様な彼女に欲情するのは
罪悪感がハンパ無いし…むしろ有り難いと言いつべきか?)

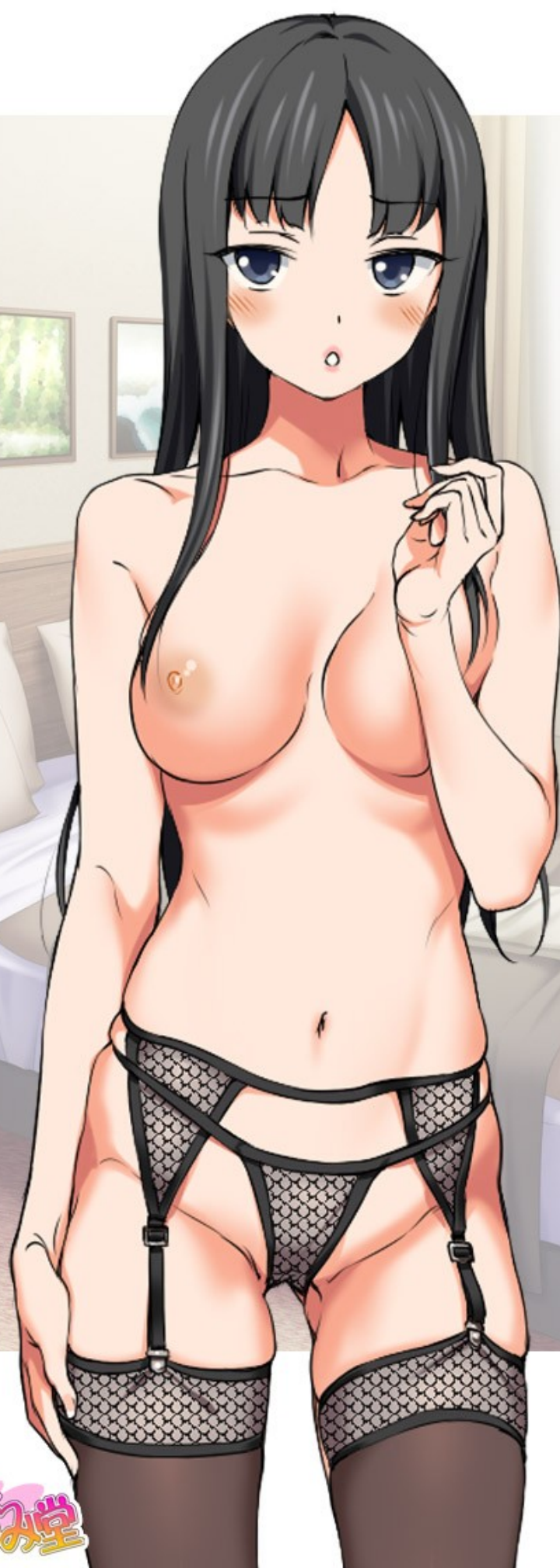
「な…何をじつと見てるのよ!?
視姦しろだなんて 誰も言っていないでしょう?
ほら…早くう」

「早くして何をだ…?」
わざとどぼけてみせる…緊張しているのだろ…
声をかすれさせてイチゴが言った

「ここまでわたしがしたのに
言わないと分からないなんて…
おじさまって本当はおバカなの?」

「この際：バカと言われてもいい
俺に何をさせたいんだ？」

「す…すると言うのなら 決まってるでしょ？」



「だから…何をするんだ？」

「…う…え…え…ちよ」



「エッチ？
ふむ…それってセックスの事かな？」

「う!?」
「おじさまはつきり言っ過ぎや!」



『えっち』だなんて緩い言葉で言われてもねえ
それとも…イチゴの言っソシは
挿入する事では無いのかな?」

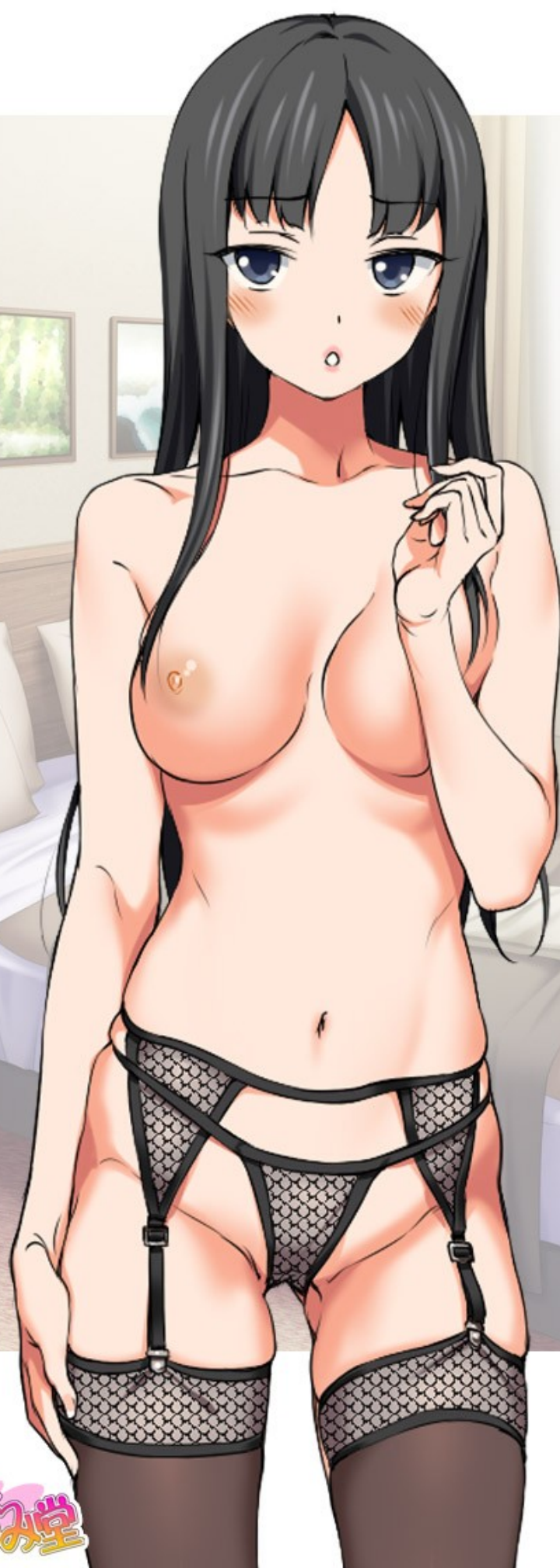
「そ…そんな訳ないじゃない!?
それくらい…察しなさいよ!」

「そうか…とはいえずちもいきなりだから
どうしたものかと——」

「いきなりなんかじゃないわよ!?
ずっとずっと好きだったんだから!
そそれに…おじさまだったって…キスしたじゃない」

「そりゃあ…したが…」

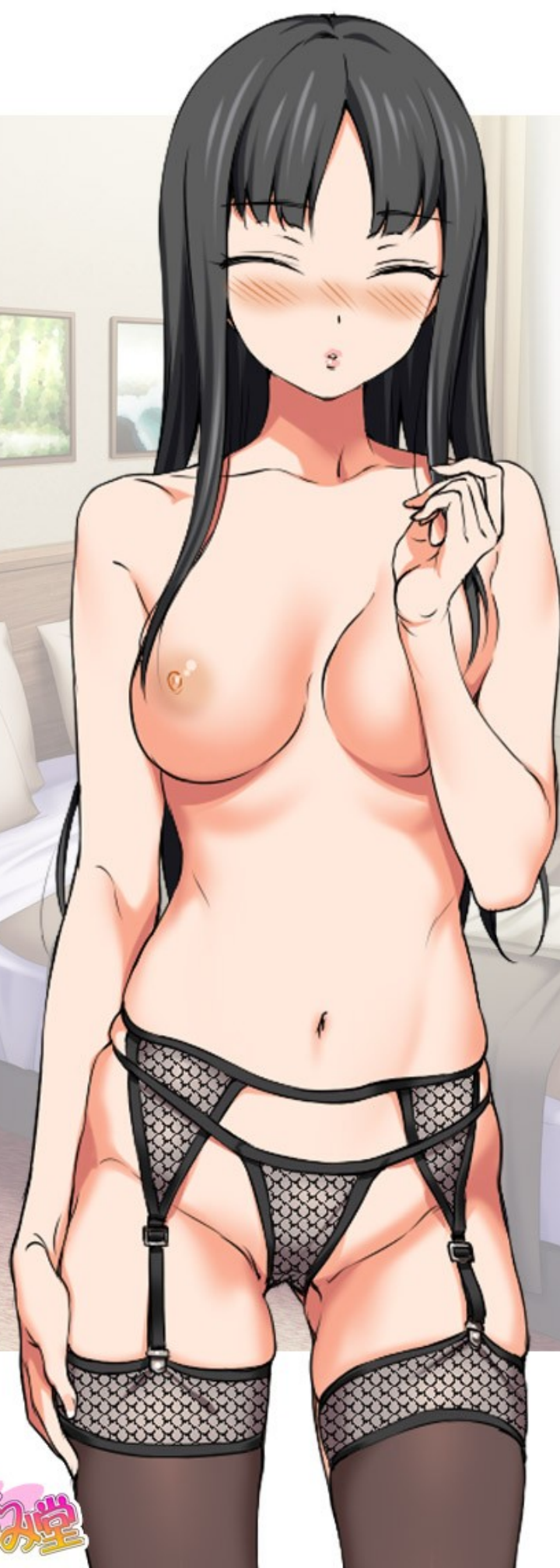
「ぎ…キス！ されたら…普通 火が付くでしょ！？
だから…もう私…我慢出来ないからこゝで…」



「おじよ——イチゴ…」

何かを思い返すようにイチゴはついつりと目を細める
思わず唾を飲み込んでしまっぽど色っぽい表情だった

「でもおじさま…意外とキス…上手だった…」



「そっか?」

「でも…」

まさか他の女で練習していたとは…思わなかったわ」

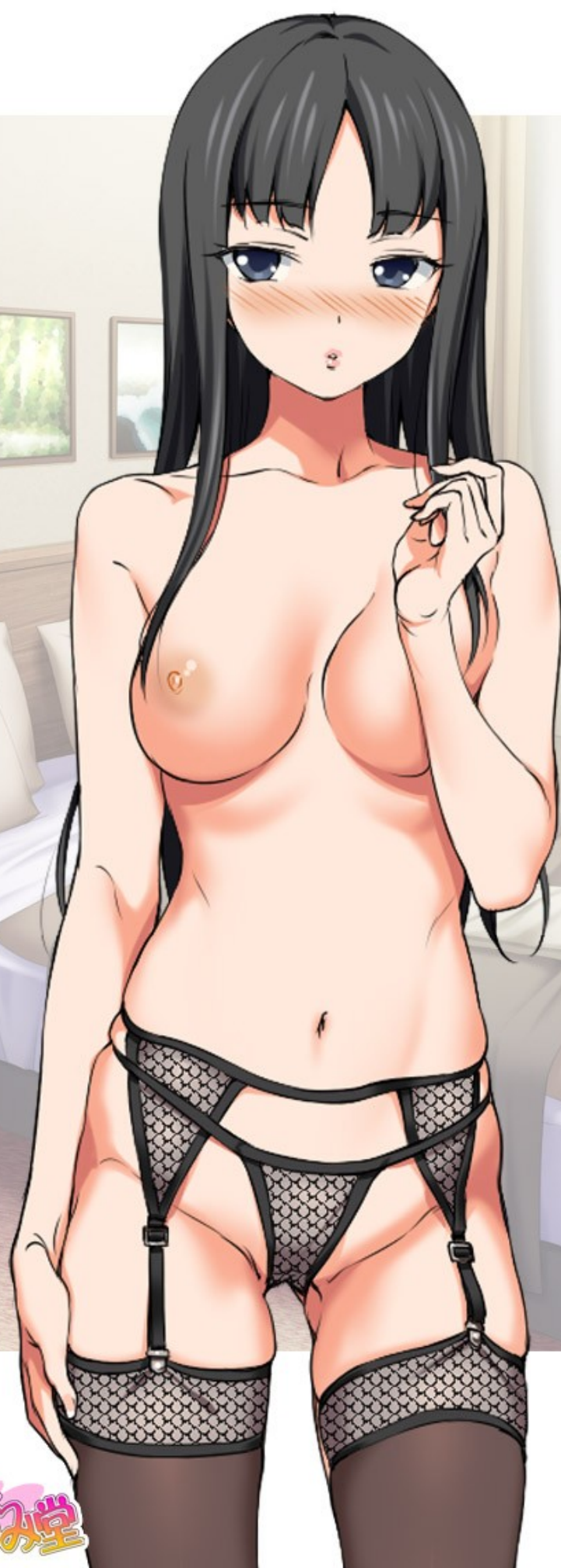
「練習して…」

（まあ…風俗のお世話になっていたのは確かだが…）

「そ…それにおじさまだつて…
前がパンパンになるほど膨らませてるじゃない…」

「そりゃまあ…ね」

「つ辛いんでしょう？ それ…
私がそれ…癒してあげたいの…
だから…おじさま 早く…来て？」



「イチゴ…」
もう我慢の限界だ!!
あらゆるしがらみも忘れて
俺はイチゴに襲いかかった

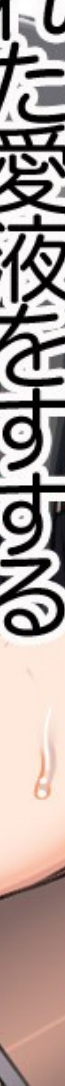


「きゅん!?」
「んっんっんっ…熱っっっっ」



「イチゴのココ…キレイだよ? ちゅっ♡」
手早く服を脱ぎ棄てるとイチゴをベッドに押し倒した
ショーツを脱がせてピンク色の淫裂に舌を這わせる

「なっなにしてるのよっ!?!」
アソコ…舐めるなんて!?!」



「ちゅっぺろっちゅっ…」
返事の代わりにイチゴの陰唇を舐め
溢れた愛液をすすする

「あつ♡ ああつ
ダメえ…そんなとく舐めちや…」

あまがみ堂

「ふふイチゴのオマンコ…美味しーよ？」
ちゅっ♡♡♡

「お…オマンコ？」
きゅあっ…きゅあっ…きゅあっ♡♡♡
「♡♡♡きゅあっ♡♡♡」

石鹸の香りのする淫裂を丁寧に舐める
初めて味わうイチゴの愛液はどこか甘酸っぱくて
喉を鳴らして飲み干したいほど魅惑的な味だった

「はぁ♡ あうっ あぁ…んっ♡
おじさまの舌が…あひっ♡」

切羽詰まったようにビクビクとイチゴの身体が跳ねる
眉間に皺を寄せて何だかとても辛そうだ

「あぁっ

おじやまああ……おじやまああ……」

「イチゴ…オマンコ気持ちよくないのか？」
愛液が溢れて来るのが嬉しくて激しくしてしまっただが…
聞いてみるとイチゴは強く首を振った

「そっ そんな…気持ちよく…なくないつ…
でも…あひっ♡お…オマンコ？
き気持ち良過ぎて…変になつちやうのお♡」

「イチゴ…♡」

消え入りそうな声でイチゴが呟く
嬉しい言葉に俺は自然と笑顔になった

「あぁっ おじさまぁ♡
オマンコお キモチ…イイのお♡」

イチゴが真つ赤な顔で恥じらいながらささやへ
可愛い…こんな顔されるとつい苛めたくなる
「もしかして…もうイキそうなのか？」

「ううう
ハッキリ言わないでよ…!!」

「さうかさうか…そんなに気持ち良いんだ？
ちゅっ」

「女の子にそんな事聞くなんて…
おじさまって本当に変態っ！」

「その変態に舐められて…
イツチャいそうになってるのはどこの娘かな？
イチゴの方がよっぽど変態じゃないか」

「だ…だつてえ 自分でするよりキモチ良いのお…♡
いつも…おじさまを想つて 独りでしていたけれど…
こんなに気持ち良いなんて…思わなかったんだもの♡」

「イチゴ…可愛いよ♡ちゅっ♡」
そんな彼女が可愛くて俺は再び秘部に口づけた

「あーっ」

「あぁ…おごりまもっ♡」

「なら…責任持って気持ち良くしてあげないとな」
行くところまで行ってしまうのは良い
そんな気持ちで俺はイチゴの膣口に指を挿入する



「あひつ♡んっ…あああつ

やあつそんな…ナカに…おじさまの指が…

んああああつ♡」

「痛く…はないうぢやあ…うぢはどつかなう?」
指の腹でクリトリスの裏側…Gスポットのあたりを
撫でてやるとぬるりとした液体が溢れてきた



「んああっ!?」

「♡いっ♡す♡いっ♡♡」

最初はフエザータッチで…そして徐々に強くしてゆく
最初は戸惑っていたイチゴも
切なそうに腰をくねらせて感じてくる様だった



「あ…らめえっ
♡♡♡あひこ♡♡♡」

大量に溢れ出る愛液が徐々に粘度を増し
クチユクチユと卑猥な音が辺りに響いた
キツかった膣内は愛液で潤い…徐々に緩んでゆく



「や…うそ…コスっちや…はあっ♡ ああっ♡
やあっ!? 腰が…勝手に動いちゃうっ♡」

切なく高い声を上げるイチゴに俺のテンションも上がる
もつともつと気持ちよくさせてやりたい
俺はイチゴのGスポットを激しく擦り上げた



「ふあ♡ ああ…わたし もうぐらめえっ♡
…それ以上されたら…あああっ♡」

イチゴの腰がガクガクと震え
嬌声と同時に指がきゅっつっつと締め付けられた
ここまで来ればもう息俺はスパートをかける



「っあああっっっ♡イク♡イツちやう♡っっ♡
んあー！あああああ♡」

締め付けの力がフツと抜けイチゴの腰が激しく痙攣する
奥から愛液が三気に出てきて摩擦がなくなる
Gスポットで膣内イキした証拠に思わず俺の穂が緩む

「あひっ♡んああ…あっ♡あっ♡
なにコレ…んなの…ひぐっ♡
わらひ…しんやん♡」

ビクッ♡
ビクッ♡

「大丈夫：膣内でイッたんだよう？それにしても…
ふふっイチゴのトロケ顔：すぐく可愛いよ♡」
思わずそんなコトを言ってしまう♡

「あっ♡ あひ♡ ああ…んっ…ら…らめえ♡
こんな力オ…みにやいでえ♡」

ビクッ♡
ビクッ♡

イチゴは全身を小刻みに震わせながらそんな風に言う
そうか…いつまでも小さい女の子だと思っていたが…
もう膣内イキ出来る程に女の身体になっていたんだ――

ビクッ♡
ビクッ♡

「…めえ…?」

「…んんん…」

ひゅ
ひゅ

グ
グ
グ

「おじさまが…
まだきもちよくないわっ!?!」

「イチゴ…気持ちちは嬉しいが…大丈夫か？」
おそろく初めて達したであろう膣内イキの直後で
イチゴの声も足もがくがくと震えていた

ひゅ
ひゅ

ガ
ク
ク

「い…いいの！」

わ…わらひの気が変わらないうちに早くっ
早く…わらひを…おじさまのオンナにしてえっ」

「イチゴ…」

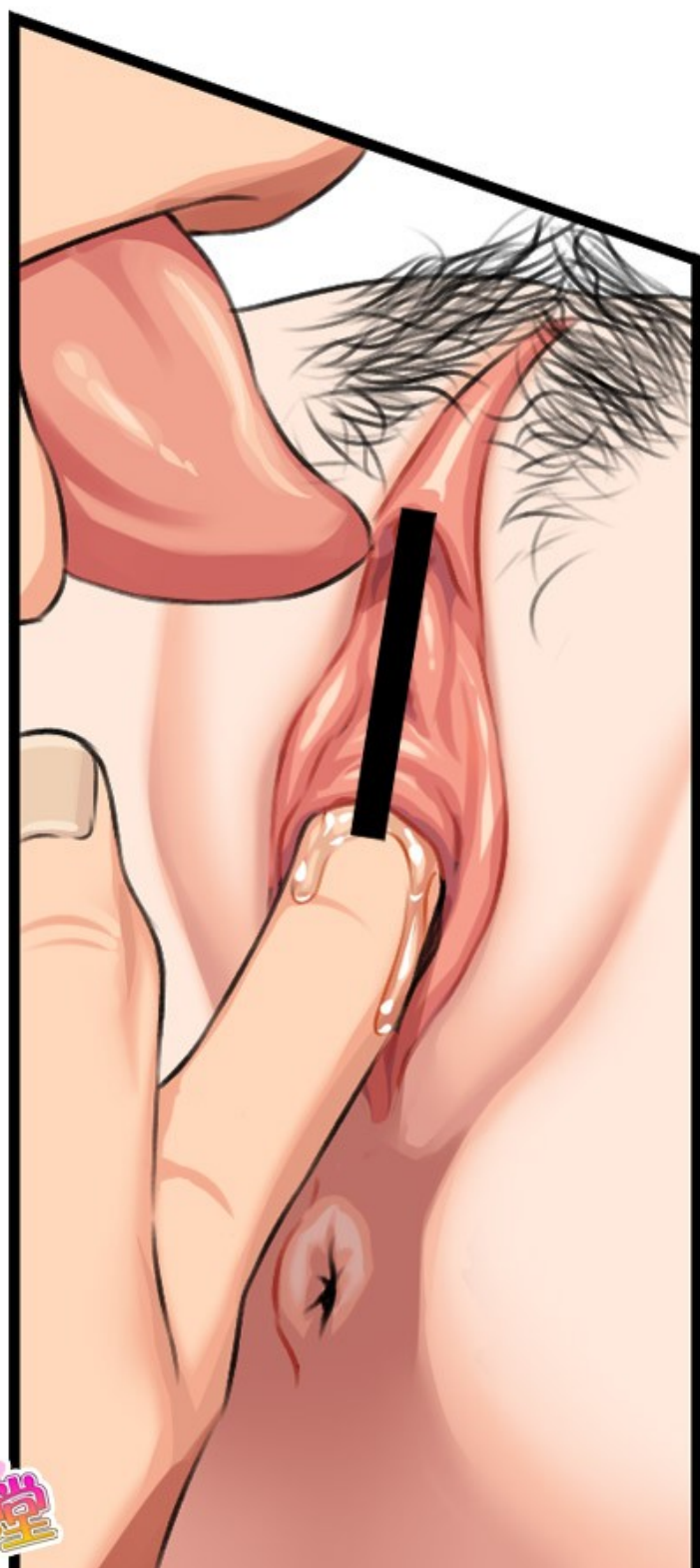
イチゴはとろとろの裂け目を広げたままそう告げた

ひゅ
ひゅ

ガ
ク
ク

俺は頷くと潤んだ秘裂に亀頭を宛がった――





入って〜んのお♡

んあああつ…!!
オチンポが…

「…っ?」

俺のチンポは半分も入っていないが…
それでも熱くとろけそつな快感を感じていた

んんん

「くっ…あっ」

「イチゴ…？…やっぱりまた今度に——」
苦しそうに声を漏らすイチゴに
俺は心配して声を掛ける

「そっ そんな事無いっ…」
おじさまと…セックスするのっ」



「イチゴ…」
イチゴが小さく呻く…と同時に俺の方に両手を伸ばし
引き寄せるとキスをして来た

「んちゅ♡ちゅっ…おじさまあ♡
ちゅく…ね…？もう…全部入った…の？」

「ちゅ…いやまだ半分以下だ」

「ふふふ」

「ふふ」

「うそっ…」

「こんなオマンコの中…いっぱいなの…!?」

「…なあやっぱり痛いんだろっ？
今日はもうやめておいたほうがいいが…」

「ふふふ」

「ふふふ」

「い…いいのっ！」

「私がそう言ってるんだからっ！」

「んっんちゅうっ…！」

強気な瞳で言うけれど…やっぱりどこか苦しかった
イチゴの大きな瞳が少し潤んで見えるのは
痛くて泣いているんだろっか？

たき
き

たき
き

「…うん うん うん」

「イチゴ…大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です」

「ええ、大丈夫です」

「ん…全然痛くないわ」

「嘘つきだな…」

「ふふふ」

「ふふ」

「ほっ 本当よ…ふふふ」

「イチゴ…」

イチゴの真剣な表情を見て言葉に詰まる。
正直言って…彼女の考えは未だに良く分からない
それでも…俺を受け入れようとする気持ちは嬉しかった

「おじさまが…
結婚するつて聞いた時…夜通し泣いたわ
どうして私は子供なの？…つて」



「イチゴ…」

「あーっ」

「あーっ」

「でももういいの…」

「おじさまを奪ったあの女は…もういないわ」

「そして今…おじさまは私を抱いている…そうして…」

「ああ…そうだな」

「ふふふ」

「ふふ」

「あうう…おじいさまあ…」

「もうすぐ…もうすぐ奥まで…入る…う！」

「くっ…凄く締め付けだ…イチゴ…」
ここまで来たら俺だってもう止められない
俺はイチゴの腰を抱いてさらに奥まで突き入れた

おん

ぐっ

「んあっ!？」

んっぐ…うっ…!

ひっひっ…ふあっ…!」

相当に痛いのだろっ？…イチゴは日本語も話せずに
苦悶の声を上げるだけ…そして呼吸を整え
なんとか言葉を発した

「おじ…さま…っ 全部…入った…？」

コキュ

ムムムム

「あああ…今度こそ全部入った…」
堪えてないとすぐに射精しそうなくらい気持ち良い
背中がゾクゾクして目眩がした

「ああ…嬉しい…♡」
おじさまと…やっぴゅっぴゅ…ああ 夢みたい♡」

「…やっぱり初めてだったんだな」
イチゴの秘部から滴り落ちる血に目が止まる

「なっ…!?」
…血が出たからって初めてかどうかは…
分からないんだからっ! やっ…んっ…んっ♡」

コキュ

ビィ
ビィ

「いやどっ見ても初めてだろっ…」
この痛がりよう？…経験が無い童貞だつて絶対分かる

「いいの！ そんな事…
それよりも…どう？ 私の身体？
一生忘れられないような記憶に…残ったかしら？」

コキュ

ハッ
ハッ

「…ああ

こんな思い出絶対に忘れられない…」

「そう良かったわ…」

じゃあ…もつと動いて？ 私の身体で…
おじさまに気持ち良く…なつて欲しいの♡」

「ふっ」

「ふっ」

「イチゴ…」

イチゴがぎゅこちなく腰をくねらせる
俺も彼女の動きに合わせて膣奥を突いてしまっ

おん

ぐゅ

「あぁっ♡

きやつ あぁ…っ！」

「はっくっ…」

激しく動かすときつと堪えられない
俺はもどかしさを感じながらゆっくり動く

ド
ン
ド
ン

キャ

「はあっ ああんっ…おじさまあっ♡
ね…？ おじさまは…いま好きなひといる…？」

「…えっ?」

「答えなくてもいいわ…
でも今は私とセックス…
しているんだから
私の事だけを考えて?」
「今だけで…いいから…くっくんっ♡」

「んっ」

「ドッ
ドッ
ドッ」

「イチゴ何を…?」

「ね…気持ち良いのならセックスに没頭して?
それで…私の身体に夢中になつて?
おねがい…ちゅっ♡」

「ん」

「ド
ド
ド」

「ああ…言われなくても俺はもう…
この身体に夢中だよ」

「そ…そう…良かった♡」

「ん」

「ド
ン
ド
ン」

イチゴが嬉しそうに微笑む
その笑顔を見た瞬間：俺は我慢が出来なくなつた
くうっ…イチゴ…そろそろ出—」

すっ
すっ

すっ
すっ

すっ
すっ
すっ
すっ

「膣内よう！」

おじさまとのはじめでは…

絶対に膣内に出して貰うんだって…決めてたんだから！」

「じ…しかし…」

「ふふふ」

「ふふ」

ずずず

「大丈夫…ちゃんと計算してあるから

本当は…孕んでしまいたいんだけど」

「…やっぱり外に」

「ふふふ」

「ふふ」

ずずずず

あまがみ堂

「ダメよー!」



「うおっ?」

俺の腰に絡みついているイチゴの脚が
ぎゅっと強く締め付けられた

72

「やあつ…!? そんな激しく…あひい♡」

「…うん…うん…」

「あ…あ…あ…」



イチゴの中に挿入したまま白濁の液を放つ
彼女の膣内に大量の精液が注ぎ込まれた

注ぎ込まれた

ひん

「あつ♡ ああんっ…
やあつ 奥…熱いのお…あひっ♡ あああつ♡」

恍惚とした表情でイチゴが俺の精子を受け止める。
肉棒を包み込んだままヒクヒクと…
さらにチンポを締め付けて来た

ひゅるる

「はぁ…はぁ おじさまぁ…♡
おじさまのオチンポが…私の膣内で…
お願い…まだ抜かないで？ もう少し…♡のままずっと♡」

「ああ…俺もイチゴの温もりを…もつと感じたい」
もちろん堅くなつたままの俺のチンポも
イチゴとまだ繋がっていたいと主張している

ドクドク
ドクドク

「ああ…嬉しい♡
最高のロストバージンだわ♡
おじさま…だいすき♡」

返事をする代わりに俺は…
頬を赤らめたイチゴの頬にキスをして…
再び深いキスをして また愛し合った

ドク
ドク
ドク
…

「……………」



「最も危険な罠：それは『今日は大丈夫な日だから♡』
たくまずして仕掛けられた性交の闇に眠る既成事実
それは突然に目を覚まし 偽りの平穏を打ち破る」



あまがみ堂

「生ハメ中出しは 巨大な罠のプレイ
そこかしこで生ターン。ピック挿入に子宮が目覚めます」

次回：『畏』



『今日は大丈夫な日だから♡』は危険な不発弾
妊娠 認知 御用心

「げふんげふんっ
…うてなんで私がむせるのよ!？」





あまがみ堂

ん...

「ああ…やっちゃった…」

「なあに？ おじさまつたら…」

今になってウジウジと——ああなるほど…
これがいわれる『賢者モード』というモノなのね？」

「賢者モードで…いや間違ではないが…」

「ついさっきまで獣の様に女体を求めていたクセに
射精したとたん聖人君子の様に性的な行為を否定する
ふむ…まさに聞いていた通りね」

「いや聖人君子もかくや…はともかくとして
男性は射精すると性欲を抑制してしまうホルモンが
大量に分泌されるんだ…」

「あらホルモンのせいにするだなんて…
それこそ男らしくないのではなくて?」

「…そもそも性行為というのは自然界において
相当な隙と時間を伴うものだからな
だから雄は行為の直後に周囲を警戒できる様に
性欲を制御する必要があるわけだ」

「ふむ…興味深いわね とはいえ…人間は理性のある
生き物でしょう？ つい先刻まで愛の行為に浸っていた
相手ならもう少し優しくしても良いのではなくて？」

『それ、その…腕枕とか？ きやつ♡』



「それが通常の男女恋愛なら私もそうしますよ！
ああ…大恩ある社長のご令嬢を
傷物にしまつたなんて私は体どうしたら…」

「もうおじさまつたら…口調が社長秘書に
戻っているわよう？今の一人は…援交JKの『イチゴ』と
そのお客様でしよう？」

「…その割には呼称が『おじさま』で…
私が教育係として長年お仕えしたところかの社長令嬢と
同じなのが気になりますね…」

「あらアラサーの男性なんて
立派におじさまでしよう?」

ぐ…

私はそのお嬢様とは10代の頃に知り合いましたが…
初対面で既に『おじさま』と呼ばれていましたよ?』

『ふむ…それはきつと

彼女のお父様が『私の弟のようなものだ♪』
などと紹介したからではなくて?』

『それは『叔父』ですが…
いやそれよりもどづしたんですかその下着は!!』

『ああ…これ?』
『ねえやがプレゼントしてくれたのよ!』

「…はっ？」

「『大好きな人と結ばれる時に
これを着て迫ればイチコロですよ…』
…ともアドバースされているわ♪」

「あ…あの人は一体何を考えて——」

「あら？ 昔ねえやがおじさまの部屋を掃除した時に
見つけた本にはセクシーな黒い下着を着た女性が
いっぱいだった…と聞いているのだけ？」

「……………ハー「メン」で」

「むうそこは否定しないのね まあいいわ
で…どうだったかしら私の下着姿は？」

「……………ハー「メンテナンス」」

「パスは一回までよう？ おじさま？ それとも…
さすがの私も躊躇してしまったあの
『とてもはしたない下着』の方がよかったかしら？」

「…ふんふん、おっぱい、お尻、お股、おまんこ、おまんこ…」

「んふんふん
もつと具体的に褒めながら…」

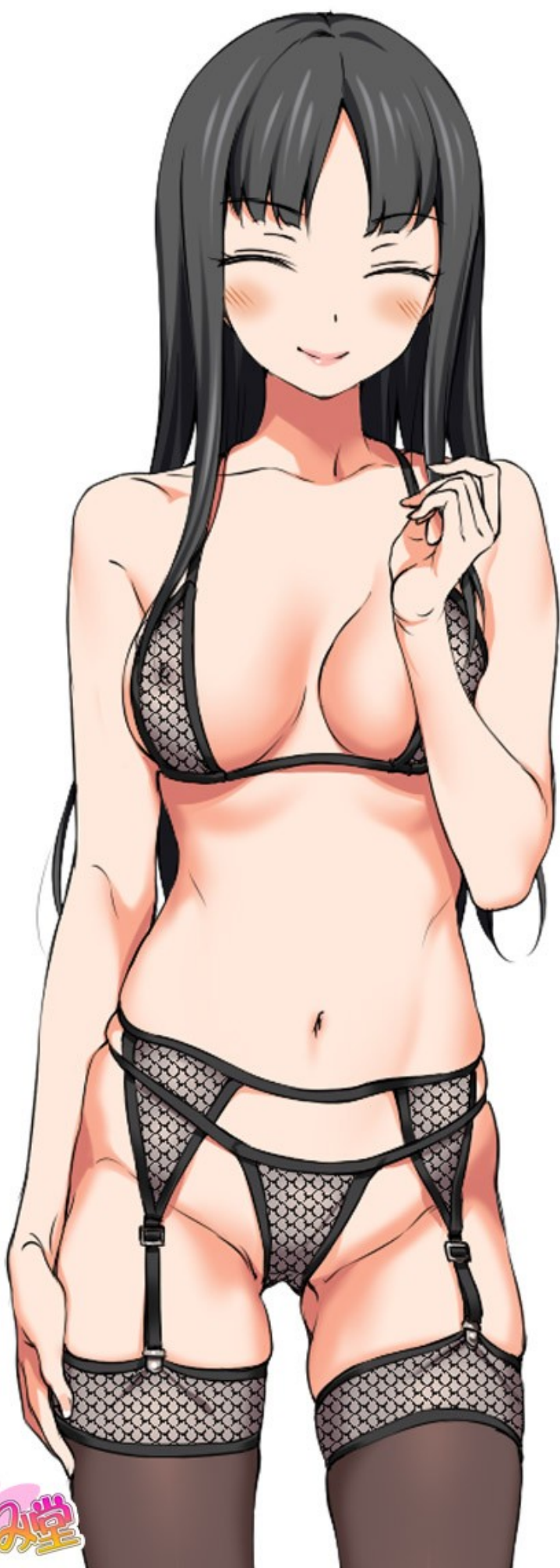
「…その白い肌に黒い下着が映えてとてもセクシーだよ
まるで月の女神みたいだ」

「ああん♡

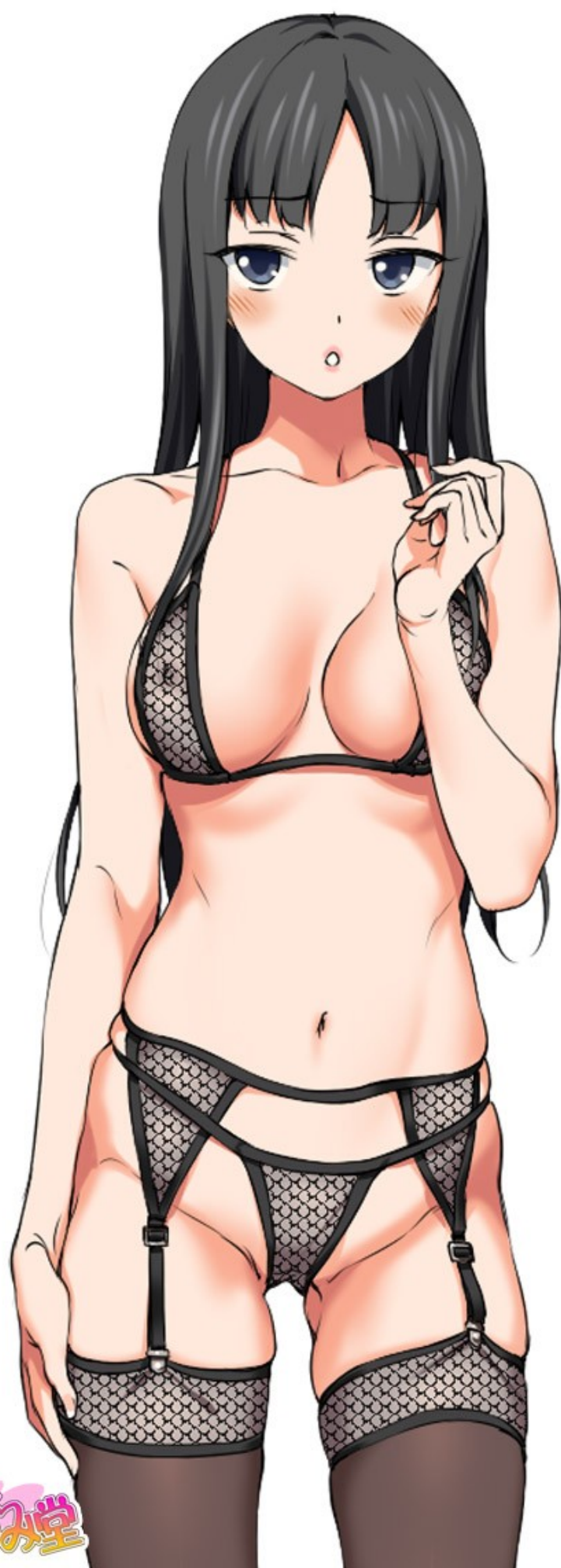
おじさまっいたらあ 本当になんたからあ♡」

「だんごマンにフー...」

「んふふ♡ まあいいわ とりあえず…
ずつとずつと思つていた人に
処女を捧げることができたのだもの」



「お…お嬢…」



あまがみ堂

「もう…お嬢じゃないわ イチゴでしょっ?」

「…その設定にくだわりますね?」



「ええそう設定でもしないと『大恩ある社長の娘だー』
とか言つていつも仏頂面でお説教ばかりされますからね
わ私だつて女の子だもの…甘い言葉で甘やかされたいわ」

「…さっしうのは私の仕事では…」

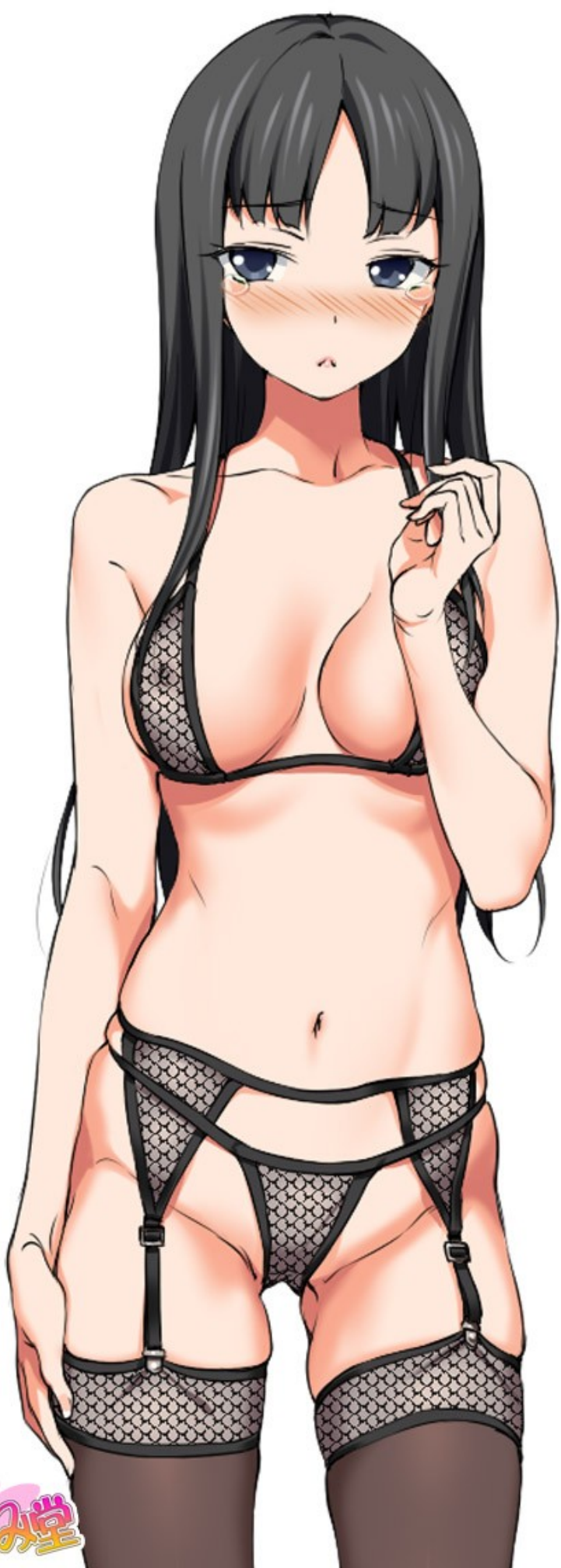


「ええ！なので！」

今はお仕事じゃなくてプライベート！

私は援交JKのイチゴなのよー！」

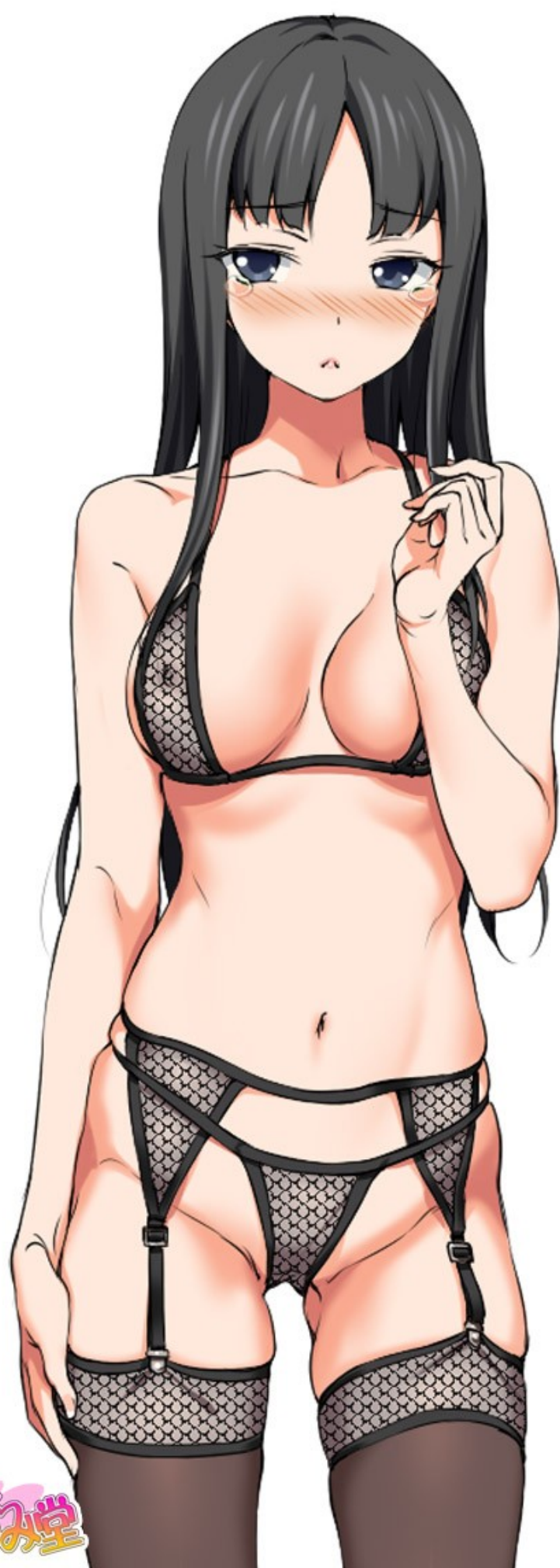
「おじよ——」



「それだつたら…」

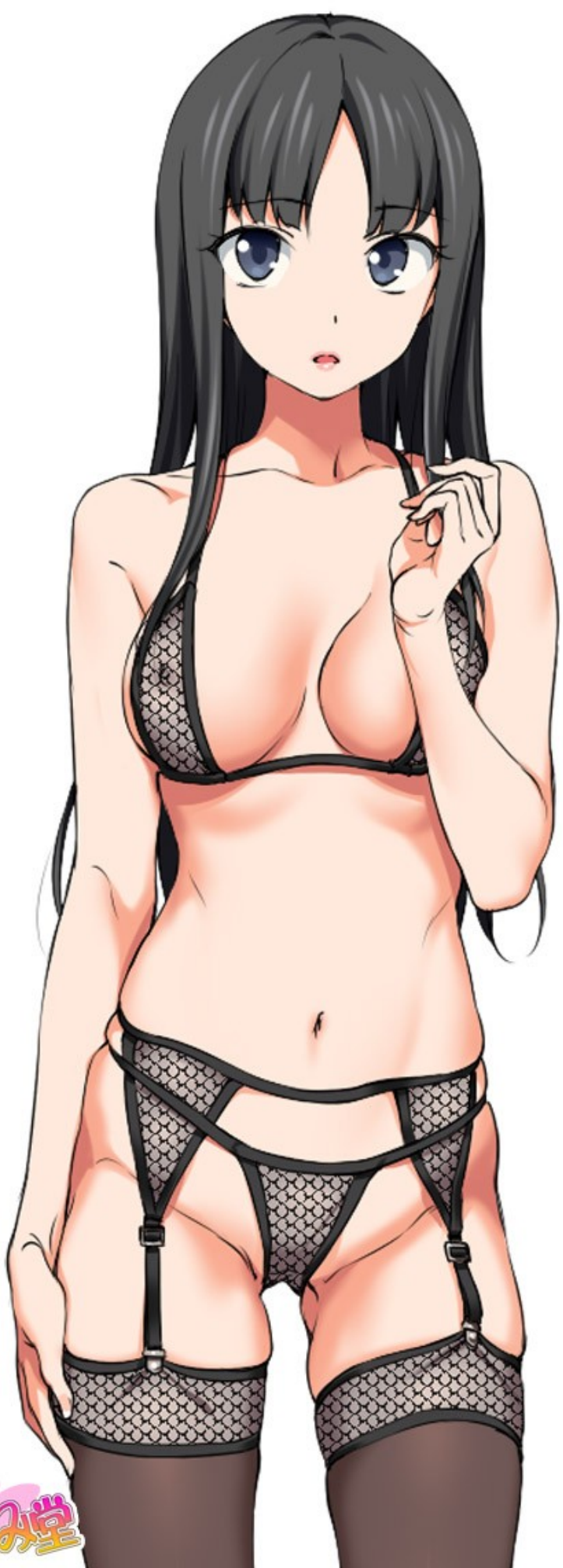
立場とか将来とか そんなの関係ないでしょう!?!」

「.....」



「わ…私だつて好きな人に甘えて抱かれて
愛を囁かれないの！ それなのに——」

「イチゴ…ぱんち」



あまがみ堂

「え!? お…おごじやないか…」

「ああ君が…俺が仕えている家のお嬢様に
よく似ていてね…つい混同してしまった…申し訳ない」



「え…ええ別に構わないわ…よう?」

「だからというわけではないけれど…俺は君の事が
すぐく気に入った なのでまたこうして会いたい
そう思っただけでも…いいだろうっか?」



「えっ!? ほんとっ? 嬉し——」

「いやいや…よく考えたらうちの嬢様が…
こんないかがわしいデートクラブに
忍び込んだりするわけないからね」



「うっ…だだつてそれは…」

「しかもこんなにはしたない
黒いレースのガーターベルトにストッキングだと…？
俺のストライクゾーンを滅茶苦茶攻めやがって…
即レイプされても仕方ないじゃないか!？」



「だからイチゴ 俺は君のリピーターになる事に決めた！
だからまたこうして逢って欲しいんだ
ぜひその下着を着けて！」



「ええええ…でもこうして逢えるのは嬉しいのだけど…
あからさまに性的嗜好を聞かされて
ちよつと引いてしまったと言うか何と言うか…」

「ああその通り俺はその程度の男だ」



あまがみ堂

「そうそんなつもりじゃ——」

「けれどもそんな俺でも…
いつか如月社長に認められる男になりたい…
それを目指してがむしゃらに頑張ってきた」



「そして…いつか社長に認められたらそのお嬢さんを
俺の嫁にもらうつもりだ！
具体的には…彼女が大学を卒業したらすぐにでも！」



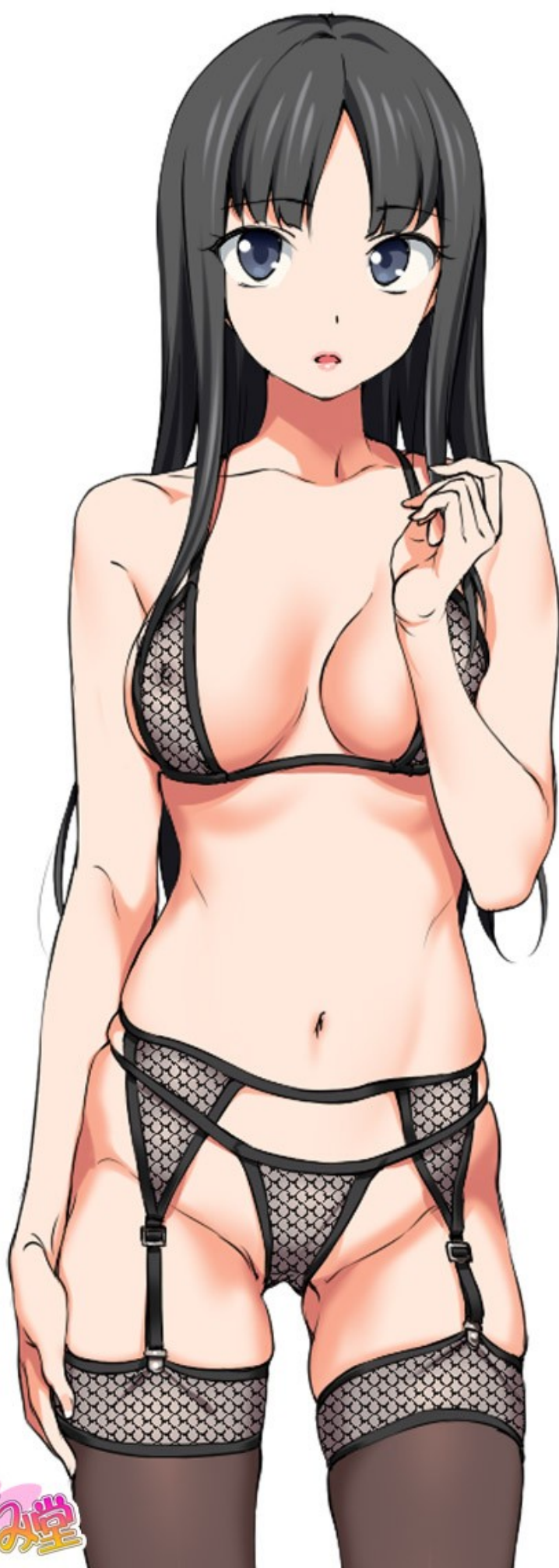
「え…？ えええっ!？」

「う…嬉しいけどなら別に大学へは行かなくても——」

「イチゴ？君ではなくうちのお嬢様の事だから！
俺がみっちり勉強を教えたお嬢様なら
一流大学卒くらいは当然の事だから！」



「…という訳で…援助交際なんだから
きつちりと援助をしようじゃないか
『毎2個』…という事は3万円がいいんだな?。」



「えっ いえ…それはその 建前というか…
別にお金はいただかなくても——」

「いやダメだ！無給じゃあ仕事に責任はもてない
だからお金は受け取る。そして責任をもつ
それこそがプロの仕事といつものだからな！」



「ええっ!？」

「そ…そういふものなのかしら…?」

「どうして...」

そろそろイチゴの身体も落ち着いた様だし...
もう少しお相手してもらいたいよ...」



「いっ!」

いえその...まだおまんこ ちよつと痛いと言っつか...あつ...」

「大丈夫だ！性器以外でも女性の体は感じるようにできているからな！それに…いくら手段のためとはいえ睡眠薬を仕込むような悪い子には…ちよつと厳しくお仕置きしてあげないとなあくくく…」



「お…お手柔らかにお願いしますうつ？」「！？」

…とっこんなふうに俺とお嬢——いぢ
『イチゴ』の関係は始まった

もちろん俺はこれが茶番だという事は理解している
けれどももう少しだけ…

今はイチゴの差し伸べてくれた手に甘えていたかった…

「今ならあまがみ堂の全作品が FANZAさんで

20%OFFセール中 ですが…

で？ それからどうなつたんですか？」

「うう…」

はぁはぁはぁ

私があんな声を出せてしまうなんて 思いもよらず…
ぐふっ…これ以上は黙秘しますう♡」





挟まっつているみたい♡



まだおじさまのアレが

1
時間前

援交JKの『イチゴ』——とウチのお嬢様である『如月綾』をひとしきり可愛いがった後……俺はタバコをふかしていた

ウチの社長はヘビースモーカーで

俺もそれに付き合っ形で嗜むうちに

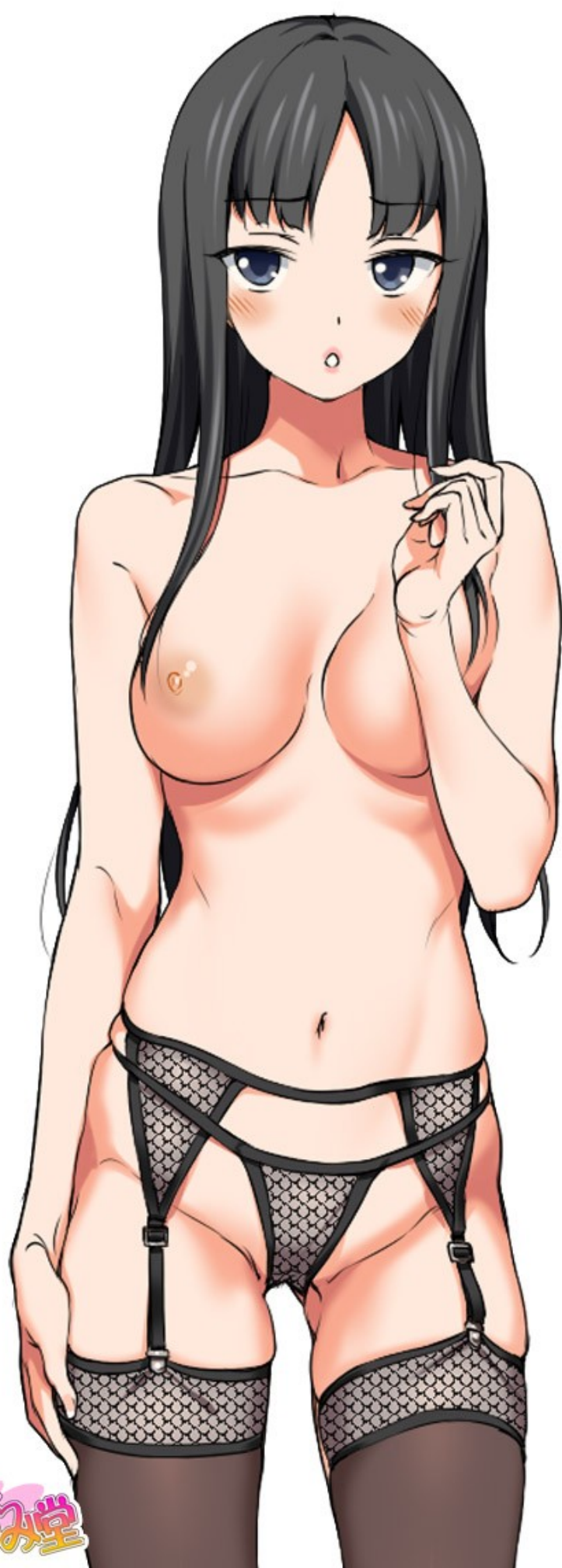
すっかりやめられなくなってしまったのだ

「ふっ…美味しい」

そんな風にひらひらとちてくるよ…

ベッドの上から恨みがましい声が聞えてきた

「おじさまの変態」



「人聞きが悪い…」

「だ…だつてそぐでしよづ!?
わ…私にあんな事を…」



「あんな事?」

それは具体的にどんな行為なんだ?」

「うう!?」

そ…そんな事を女の子の口から言わせるなんて…
やっぱりおじさまは変態よ!？」



「いや…」

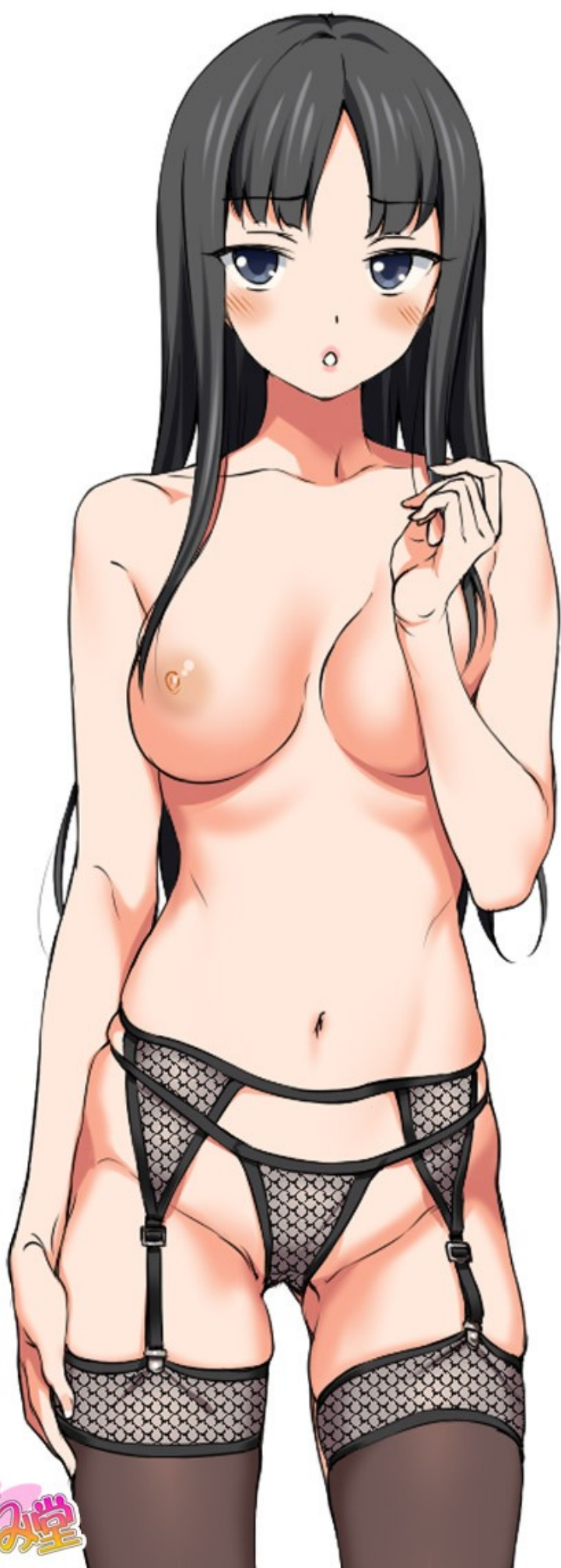
だからあれはちよつとしたお仕置きでめいへん——」

「だ…だからって私はあれだけ駄目だって言ったのに…
もう…おじさまの馬鹿！」



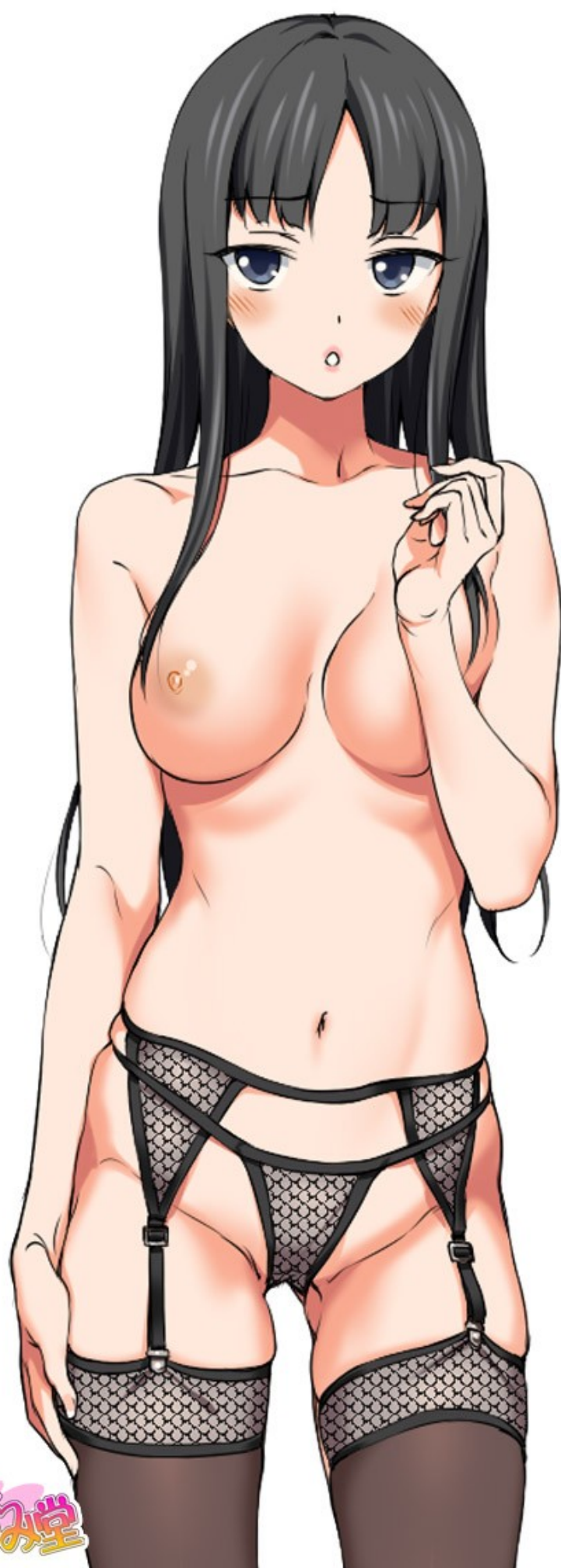
「そんなに嫌だったのか？
ならこんな関係も今日限りで——」

「い…嫌だなんて言っていないでしょう!?
その…おじさまが 強引にあんな事をするから…」



「あんなに…おねえ…」

誤解のないように言わせてもらえば
それほどアブノーマルな事をした覚えはない
ただじつくりと丁寧に関わった彼女の身体を愛撫したただけだ



とはいえ…イチゴの身体は予想以上に敏感で

俺が指や舌を這わせるだけでビクンビクンと痙攣した
そんな反応に俺はつい張り切ってしまったのだが…

「もう！」

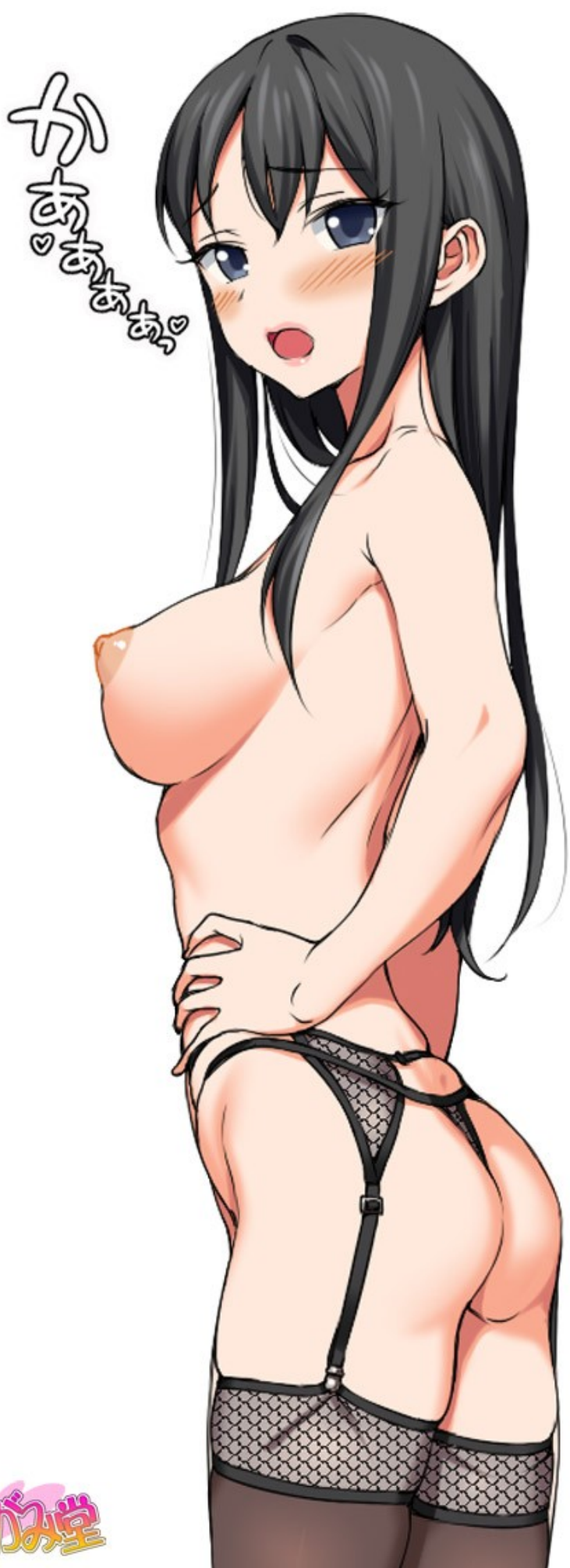
「忘れたとは言わせないわよー！」



「ああ…覚えてるよ

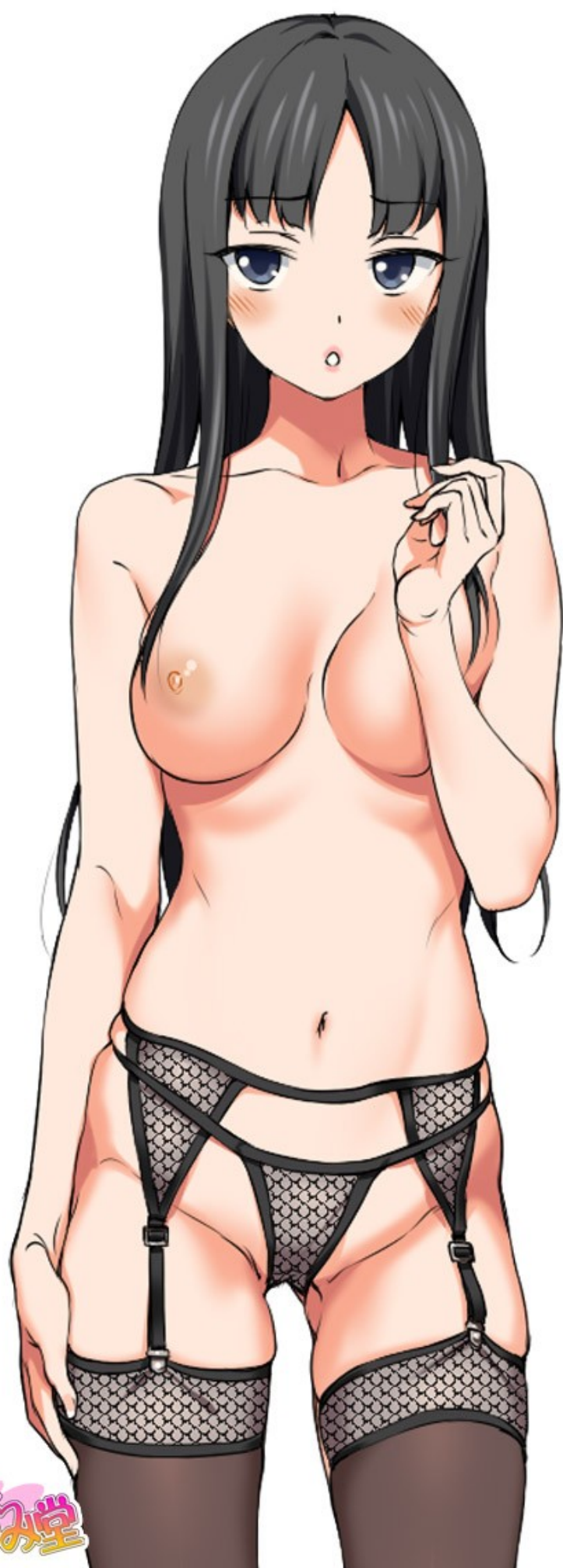
俺の腕の中で震える君はとても可愛かったよ…イチゴ」

「なっ!? も…もう! おじさまの馬鹿!」



「褒めたのに…」

「ほ…褒めてなんていないわ！
もう…馬鹿にしてー！」



「馬鹿になんてしていないさ
あまりにも可愛かったからつい…ね」

「…その『つい』で私を辱めるだなんて…!」



「また人聞きの悪い…」

とはいえ…彼女の言っていることも分からなくはない
俺が調子に乗ってイチゴの体を可愛がってるうちに
彼女は何度も何度も激しく絶頂を繰り返し…



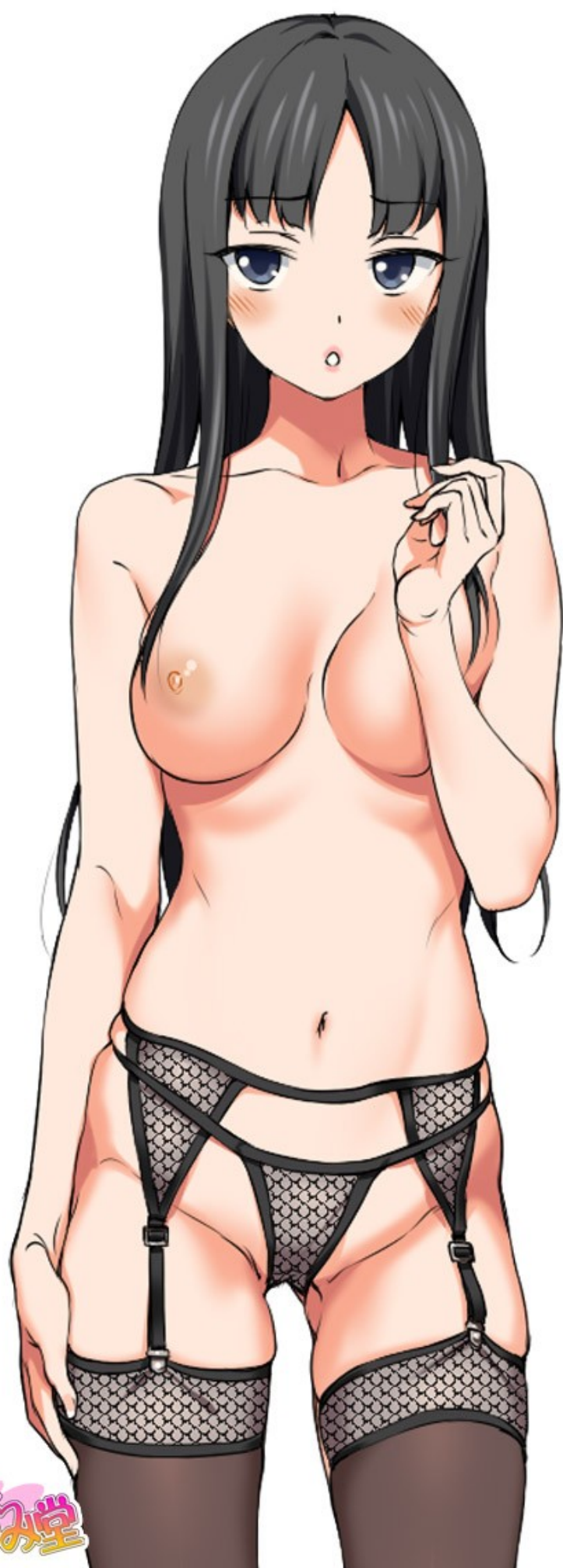
しまいに何と言ったかその…
ベッドの上で失禁…してしまったのだ

「うう…私汚されてしまったわ…
もうお嫁にいけない…」



「いや…そんなことは…
それにさっきも言ったが大学を卒業したら俺が——」

「ふん！ 援交JKを買う様な変態オヤジに…
私が嫁ぐだなんて思ったら大間違いよ!？」



「へ…変態オヤジ…」

「お…おじさまっ…」



「そ…そうだよな…」

「こんな回りも歳が離れたオッサンになんて
似つかわしくないよな…」

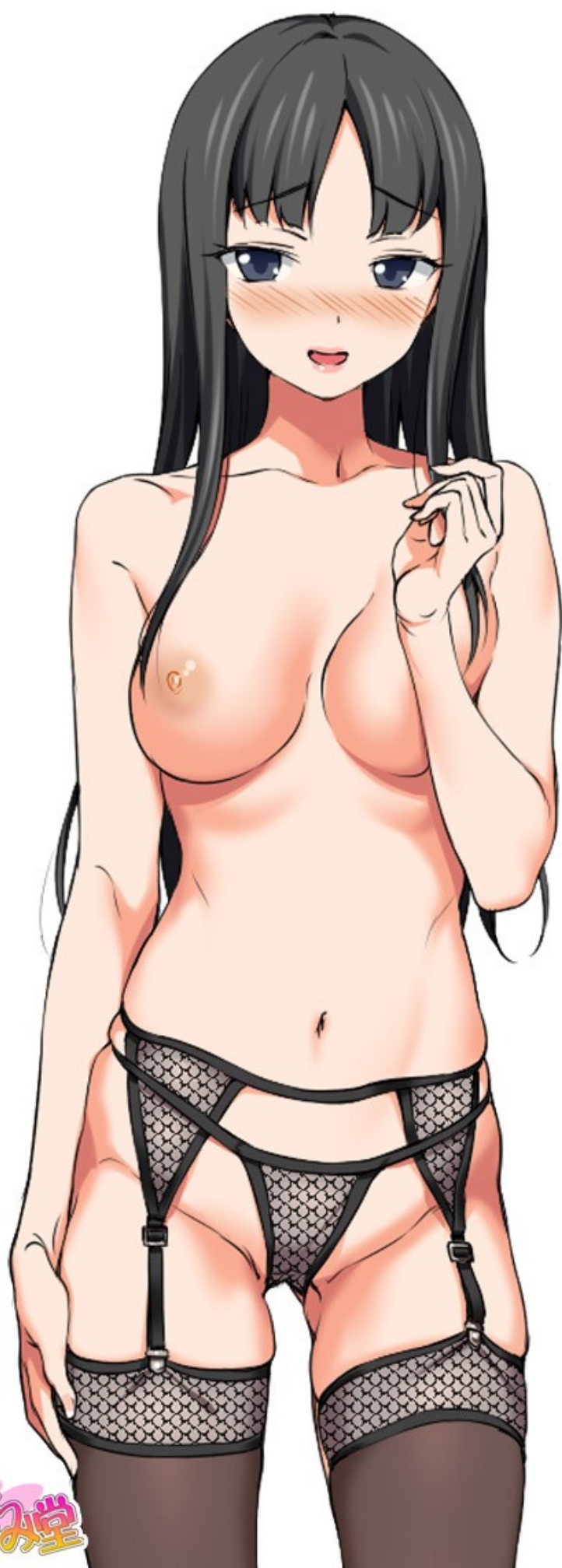
「そそそ…そんな事はないわ！」

私…いえその…お嬢様は絶対おじやまの、ム…その…」

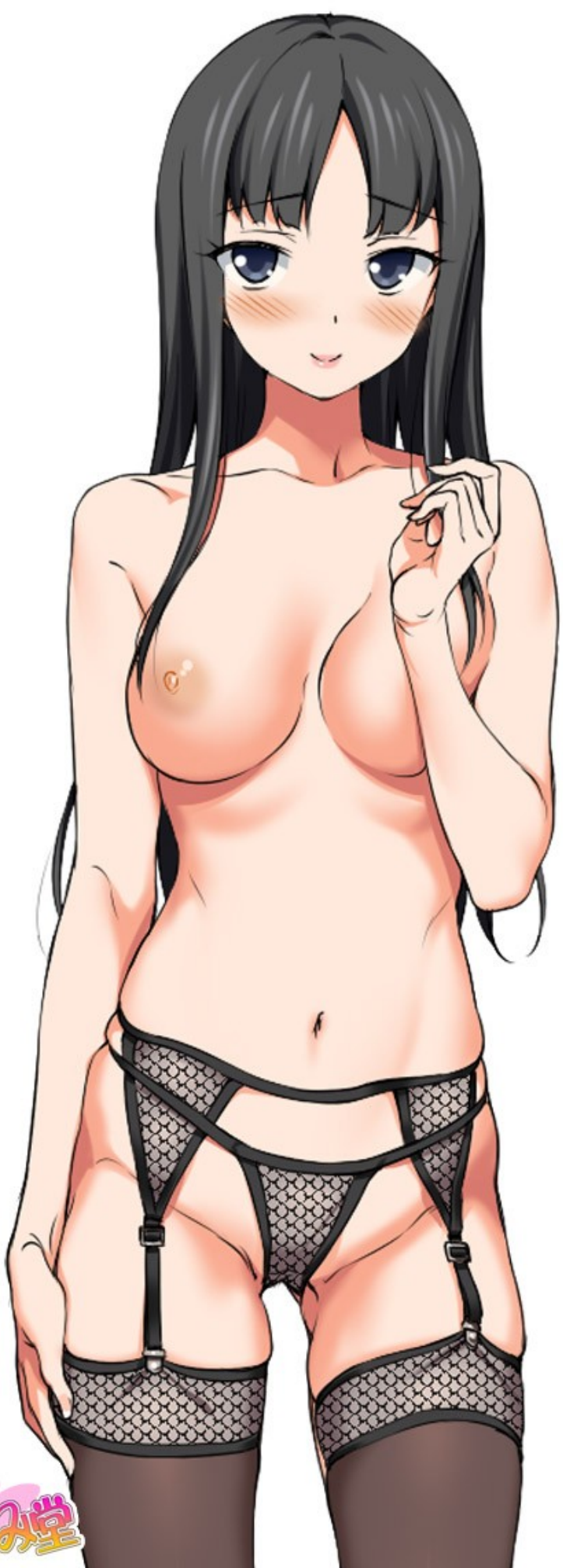


「ええと…」

大好きだと思っんです…きつとたぶん…」



「ええ…小さな頃からずっと
おじさまのことだけを想っていたわ…本当よ?」

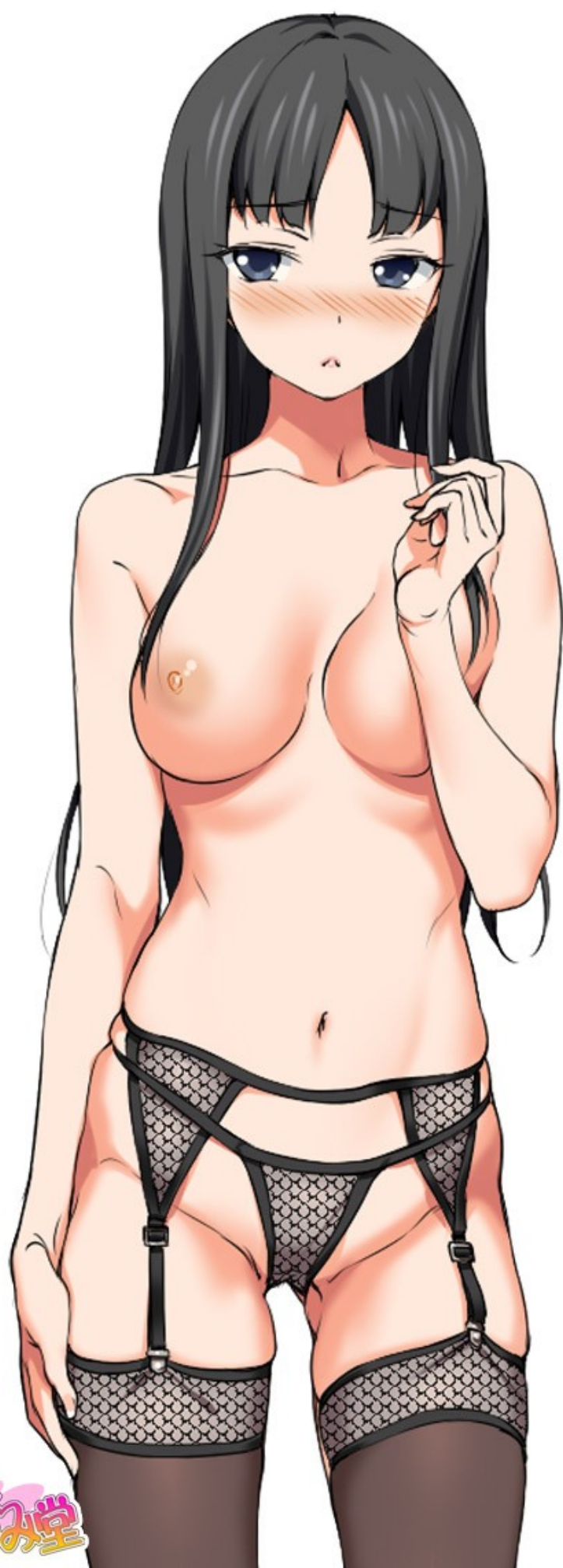


「お…お嬢じゃないわ…
私は『イチゴ』よ」



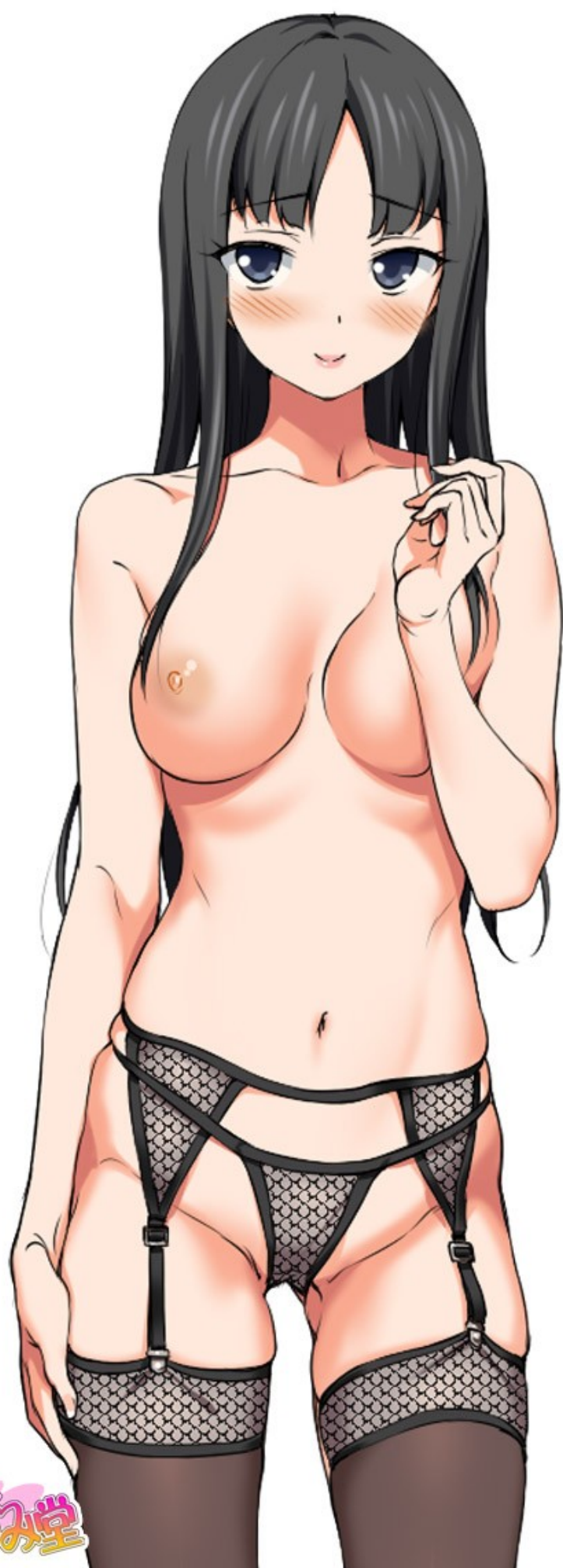
「…そつだったでも…」

「で…でも何？」



「今だけ…今だけは呼ばせて欲しい…
俺もあなたのことが大好きですよ俺の…お嬢」

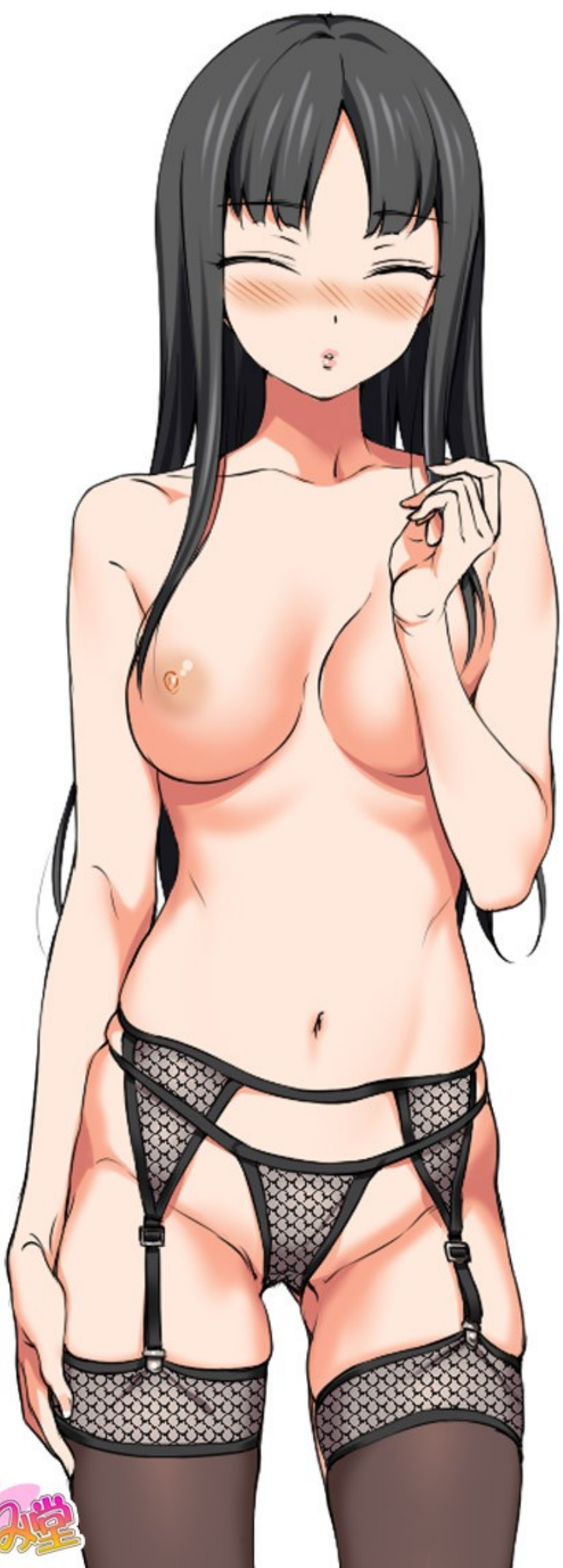
「嬉しい…♡ おじいちゃん…」



あまがみ堂

「お嬢…」

どちらからいともなく身を寄せ合っ…
互いに抱き合っくてキスをする。



うっとうしい目を閉じる彼女の体は小さく震えて…
そんな彼女をまた俺は強く抱き締めた

現在

「うう…」

まだおじさまのアレが挟まっっているみたい…」

「…たとえそれが事実だったとしても
淑女はそんな事を口にしないものじゃないか？」

「あら 今の私は残念ながら淑女じゃないわ
援交JKのイチゴよ♪ おじさまっ?」

「んーでー いやそっつだな」

そんな風に言いながらもイチゴは俺の腕にしがみつく

本来ならば…ホテルの廊下をJKと

腕を組んで歩くだなんてあつてはならない事だが…

彼女の幸せそつな表情にまあいいかなとなすがままにする

「ね…おじさま?」

今度はいつ逢つてくれるの?」



「もっ次の話か?」

「だって…

せつかくおじさまと…ういう関係になれたのだもの
次が待ち遠しいわ♡」



「そう言ってもらえるのは嬉しいけれど…
君は夜に出かけるのは難しいんじゃないか？」

援交JK『イチゴ』のロールプレイはともかく…
こっ見えても彼女は大会社のお嬢様だ
そっそっ独りで夜遊びさせる訳にはいかないだろっ



「あら 大丈夫よ

そのあたりはアリバイを作ってくれる人がいるから♪」



「アリバイ?それって...」

「ええ 姐やよ♪」



あまがみ堂

「あ…あの人は何を考へて…」

彼女の言う『姐や』とは…
俺と同様に如月家に仕える女性で
かつて外様大名だった奥様の実家の
筆頭家老家の長女だ



そんな彼女は住み込みで
奥様付きの秘書の仕事をしており
『お嬢』にとっては姉の様な存在であるのだが…

「あー！怒らないで？・おじさま…
姐やは私とおじさまの事を
応援してくれているのだから♡」



「彼女のそれは応援といつても…
面白がっている様な気がしてならないんだが…
ではこのあと彼女が？」

「ええ 今夜は姐やと買い物に来ている」といっているわ
だからこの後 おじさまと別れた後
姐やと待ち合わせしているの」



「お嬢…？判っているとは思いますが…
くれぐれも彼女には余計な事を言わないで下さいね？」

「うっ…それなんだけれど…」



「チビ…チビ…」

「その…私ね？」

姐やが協力してくれた見返りを要求されていて…ね？」



「今日おじさまとあったアレコレの詳細を…
『ぜひ聞かせてほしい』って♡」



「あ…あの女…」

これは俺からもきつちりと言っていてやらなくては…
そう思っていた矢先の事だった

「きゅあめ!?!」

「きゅ...きゅ...したん?」



「お…おじさまの…その…
出てきちゃった♡」

「……………」

Love

見れば…イチゴの太股に
トロリと伝つ自濁した液体が…
それは俺が彼女の膣内に放つた精液に他ならなかった

「ズズズズ…ズズ…!? おじやもあー!」



「ふ…ふらふらでも何かで拭いて…」

「さ…こんなズズでスカートをたくし上げない!?」

「そ…そもそもおじさまが悪いんでしよう！
私のおマンコに溢れるほどの精液を…
中出しなんてするから!？」

「お…お嬢!？」

かあ♡ああ♡あ♡

トキッ

静かな高級ホテルの廊下に響くそんな彼女の声…
どつやら当人はテンパってしまい
それどつろではない様子…

俺はそんな彼女を女子トイレに押し込むと
深くため息をついた

我に返った彼女が個室で悶絶の悲鳴をあげたのは
その数秒後の事だった…

「今ならあまがみ堂の全作品が FANZAさんで

(旧DMM)

20%OFFセール中だっ♡

んぷぷW イチゴゴってば
ふだん大人ぶってるケド…
こーゆー時は メツチャ
チヨロいよねえW

ガーン

酷いっ!?



あまがみ堂

すずい...

おじさまのおチンポ
ガチガチになってる...♡

数時間前



『困っています
ゴ有り お城別
イチゴ♡』 毎2個でお願いします



そんなメールが俺のスマホに届いたのは
彼女の学校の授業が終わったであろっ頃合いだった



「またウチのお嬢様は…」

「ごういづ知識を何処で仕入れて来るのやら…」

この「見意味不明な文章は
援助交際を希望する女性達が
援交掲示板で使う隠語…
一種の暗号の様なものだ」

困ってます…援助交際を希望
ゴ有り…コンドーム必須
お城別…ラブホ代は男性持ち
苺2個…イチゴ15万×2=3万円

…と言いつつ3万はおおむねの相場との事

『携帯代が払えなくて』

『ライブのチケット代が必要で』

などと頭に付くことが多いらしいが…

実際はお金に困っている場合はほとんど無く

『他の娘が持っていないブランドものが欲しい』

程度の小遣い稼ぎ感覚で気が向いたらやるんだとか…

「そして……ウチのお嬢は援交嬢……に夢中……と」

俺は苦笑を浮かべつつ援交JKのイチゴ……こと
我が社の社長令嬢である『如月綾』に
某高層ホテルのラウンジでの待ち合わせを伝える

「ま…楽しみなのは俺も一緒だけだな」

大恩ある社長には申し訳ないと思っではいるが…
もっ少しの間だけ…援交JK『イチゴ』として
彼女との逢瀬を重ねていたかった——

その晩



「おじさま？ フエラチオをさせて欲しいの」



「.....
部屋に入るなりいきなりなんて事を言っただけだ...」



「だ…だつてえ」

「だつて…?」



「姐やが言うんですもの…
『フェラチオを制する者はセックスを制す!!』って」

「……………あの女!？」



「ええと…ね？この前…おじさまが私のお…おマンコを
いっぱい舐めて…何度もイカせてくれたでしろう？
それでね？私…」

「…でそれを彼女に報告・相談して…
得られた回答がフェラチオである…と？」

「んく」

「まったく...」



『姐や』『こと』『高務桜子(たかつかさくらこ)』『女史は
『イチゴ』『こと』『綾お嬢様の 援交』『こと』『この協力者にして
俺の同僚でもある女性だ…』

結果的には俺とお嬢の『この関係を取り持つてくれた
恩人とも言えなくはないが…どつにも恋バナと下ネタを
お嬢から聞きだして楽しんでる様に思えてならない…』

「ねぇ…どうでしょう？ おごれかも♡」

「どうでしょう？ 何も…
新しい洋服は面から評判を得るから？
でも無さく思われる…」



「…そうなの?」

「はあ…」

「そもそもイチゴはフェラチオが何だか知っているのか?」



「むう…それくらい知っているわ

お…おチンポをおくちで舐めたりする行為でしょう?」

「おおむねその通りではあるが…
ではその行為を映像などで客観的に見た事は?」

「は？…性行為よね？ フェラチオって…」

そんな行為を映像にしたものが…流通しているの？」

「おおっ…」



どつちからウチのお嬢様はAVをぐっ存じないらしい

そこを純と取るか世間知らずと取るかはさておき…
俺はスマホを取り出して『フェラチオ』と入力
検索された動画を適当に選び…再生させた



「ちよつと…おじやま…」

人と話している時に スマホをいじるなんて…え!?

「ま…口頭で説明するのなんだ
百聞は二見にしかず…と」



「え…ちよつ…」

画面杯に女優の顔と男優のチンポが大写しになった
それはモザイクこそかかっているものの――

それを見たイチゴが
悲鳴を上げたのは言ってもない…



「あうあう…」

（ズンズンと胸が大きくなった様だな…）



「あんな・ヒョットコみたいに…
それに顔にいつぱいかけられて…あああ」

「イチゴ…落ち着いてくれ フェラは原則的に
アダルトなビデオに出演している女優や風俗嬢が
する行為であつて…必ずしも一般的な行為ではないんだ」



「そう…なの？」

「ああ挿入の前に十分に濡らさなければ必要のある女性と違い
男は興奮するだけで勃起して
挿入可能な状態になるからね」



「え…？ なら どうして…」

姐やは私にフェラチオを勧めたのかしら？」

「それは…まあ確かに愛情故の行為ではあるし
愛する女性にされて嬉しくない男は居ないからね
ただそれは——」

「なら…私やるわ!」

「…イチゴさん?」
今の俺の話聞いていたのかな?」



「ええ…だって私おじさまを愛しているんだもの♡
だから…フエラチオしたいの…
ね…？それでもダメ…かしら？」

「…………ダメじゃないです…はい」



「すすい…おじさまのおチンポ ガチガチになつて…
み脈を打っているけれど…気持ち良いの?」

レレレレレ

「ああもちろん気持ち良いよ」

「ええと…さっきの動画の通りにすればいいのね…
でも ちょっと怖いかも…」

レキレキ

生真面目な彼女らしくチンポを見つめ
真剣な面持ちだ何だか焦らされているみたいで…
それがまた妙に気持ち良かった♡

「ああのねおじさま…？」

「もしも歯が当たったなら…ぐっめんなさいね？」

ぐっめん
ぐっめん
ぐっめん

イチゴは小さく舌先を出すと顔を近づけた

「ちゅっ♡

ん…熱くなってる♡ちゅっ♡」

ちゅっ♡

ちゅっ♡

「くっっっ！」

舌先が亀頭に触れた瞬間…焦れるような快感が股間から背筋へと抜けて腰が跳ねそっになる

「ちゅっ♡むっ…っこれでいいのかしらっ…ちゅっ♡
んふ…先っぽがツルツルしてるっ♡んふっ♡」

イチゴの舌が這ったびに
じりじりと熱い快感がチンポに走る…そして
チンポを舐める時のウットリとした表情がたまらない♡

「どろろ…かしら？ ちゅっ♡」

「気持ちいい？ ちゅっ♡」

「ちゅっ♡」

「ちゅっ♡」

「へい…気持ち良いわ…イチゴ♡」

「ちゅっ♡ぎゅっ♡じゅん♡♡嬉し♡♡
でもすぐ張り詰めて…苦しゅう…
んっ♡ちゅっ♡痛くなるの♡」

ちゅっ♡ぎゅっ♡
じゅん♡♡

「あああ…痛くない
もっと強くて…大丈夫だっ」

「ちゅっ♡そろそろなの？・じゃあ…ちゅっ♡
もうちゅっ♡と強くしてみろわねっ？」

ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡

イチゴの手が優しく竿を扱き
亀頭に舌を這わせてくる…じりじりとした快感が
だんだん強烈な快感になって来た

「んっ♡先っちよから…ヌルヌルしたのが出て来たわ…
ね…これちゅっ♡なあに?」

ちゅっ♡
はっ♡
ちゅっ♡
はっ♡
ちゅっ♡
はっ♡

「か『カウパー氏腺液』…通称『ガマン汁』だ…
お男の愛液な様なもので…
気持ち良くなるよ…出るんだよ」

「そうなのね…ふふっ♡ちゅっ♡じゅるるっ♡」

嬉しいのかイチゴは笑みを浮かべて舐めてくる。
我慢汁と唾液が混じり…
又ル又ルした感触が亀頭を這い回る快感に身悶えする。

「ね…おじさまぁ♡精子…出してもらなっ♡
いいのよ？♡ぐら♡♡ちゅん♡♡」

ちゅん♡♡ちゅん♡♡

「あっあああ…」
舐められ擦られる焦れた快感…
愛しいイチゴの舌使いに悶絶しちゃうになる

「んふっ♡おチンポが…脈打っている♡ちゅぽっ♡
ね…？我慢しないで…ちゅぽっ♡

おじさまの精子…たくさん吐いて♡ちゅぽっ♡

ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡

「あああっももっダメだっ」

イチゴの舌の動きと扱く手の動きが加速する

尿道口に舌先が這った瞬間頭の中に閃光が走った

「ヨウキニモ、ヨウキニモ」



イチゴの顔めがけて大量の精液が吐き出される…
まるで魂が引き抜かれた様な快感に
俺は我を忘れて身を任せた



「すい……んなにっはい……」

↑↓↓↓

イチゴすまない君の顔に——んくっ」

「そそんなに気持ち良かったの…？ おじさま」

「あああ…そんなに気持ちのいいフェラは初めてだ
愛しいよ…イチ「♡」」

「おおじさま…ああ嬉しい…♡
あ…いけない精子は飲むモノなのよね？
では…いただきます♪ れろっ♡」

レキレキ

れろっ♡

口の周りに飛んだ精液を舌先で舐め取るイチゴ
上気した顔に白い精液が艶めかしく映った

「ん…おじやまの精ナ♡おっ♡」

キュン♡

えっ♡

「い…イチ「♡」」

「——くはないいふふ!? んぐー」



「い…イチャ!?」

「うううゝべんださいい

精子が…こんなにエグいお味だなんてえええ…」



「ああほら…全部出していいから…?」

判つてはいたが：つい先日処女喪失した女の子に
精飲は厳しかったらしい…



そんなイチゴが立ち直るまで…
俺は彼女を膝に乗せて…
ひたすらその頭をナデナデしつづけるのだった…



「今ならあまがみ堂の全作品がディーエルサイトコムさん

(旧DDMM)
FANZAさんで

半額セール中です」

愛を見たのが幻想なのか
心の渴きが幻想を生むのか
精子が美味しい♡などという事が
幻想に過ぎない事は
非処女の誰もが知っている

次回「再会」
精液なるものが
牙をむく

げふん
げふんっ!?



気持ちよすぎっ…
おまんこ

変になっちやういっ
♡



数分前



「うっ…」

おじさまの精子がこんなに苦いだなんて…」



初めてのフェラチオで自らが搾り取ったザーメン…
その『お味』を確かめてはみたものの
イチゴはその苦さに閉口している模様



「いやだから…
そんなにムリをして飲むモノでも」



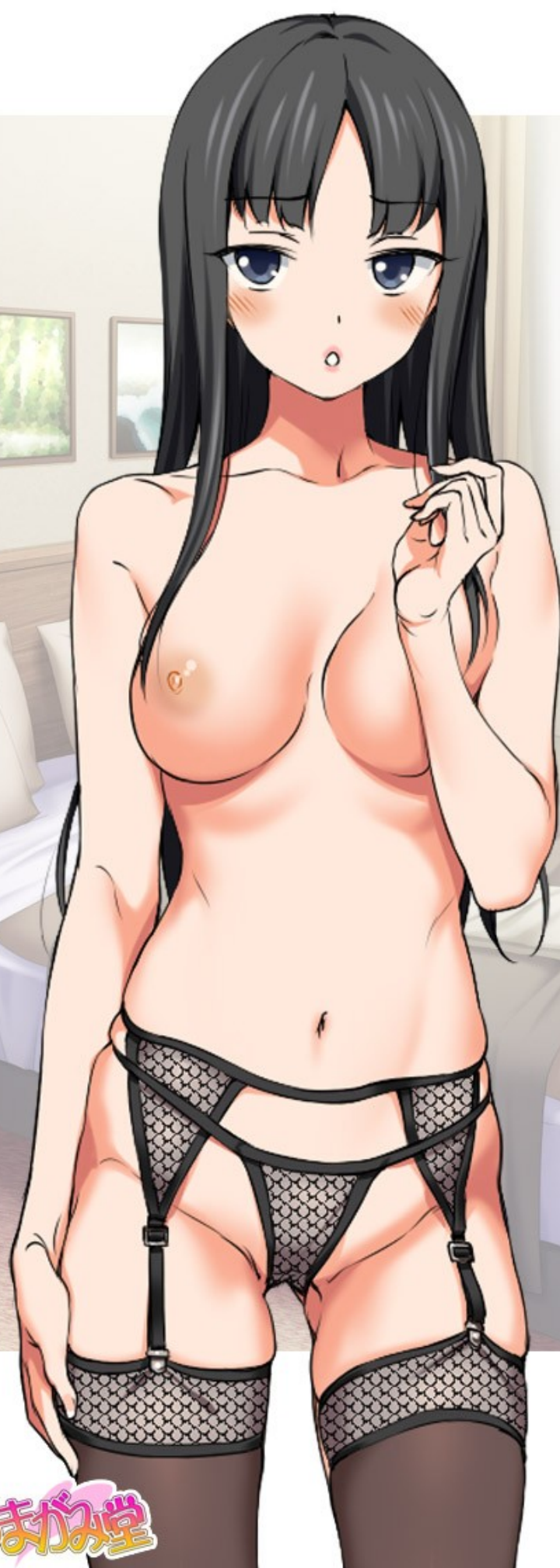
「だ…だって… 姐やが言っていたのよ？」

『フェラチオを制す者はセックスを制す』って!？」

「あの女…まあ確かに自らの口唇のみで

男性の快楽を自在にコントロール出来る様になれば

ある意味セックスを制すとも言えなくはないだろう」



「そそうなのね…
なら——」

「ただし…それは十分な経験を積んだ女性がするモノで
ましてや必須技術でもなんでもないのでないから
そのあたりを混同しないように」



「えっ?」

「…そうなの?」

「そもそも…」

「イチゴがっつして俺と逢っっているのは…
セックスに興味があるからなの?」

「ちっ 違うわ！」

私は本気でお願いしてるの事を…」

「…ヤキ」

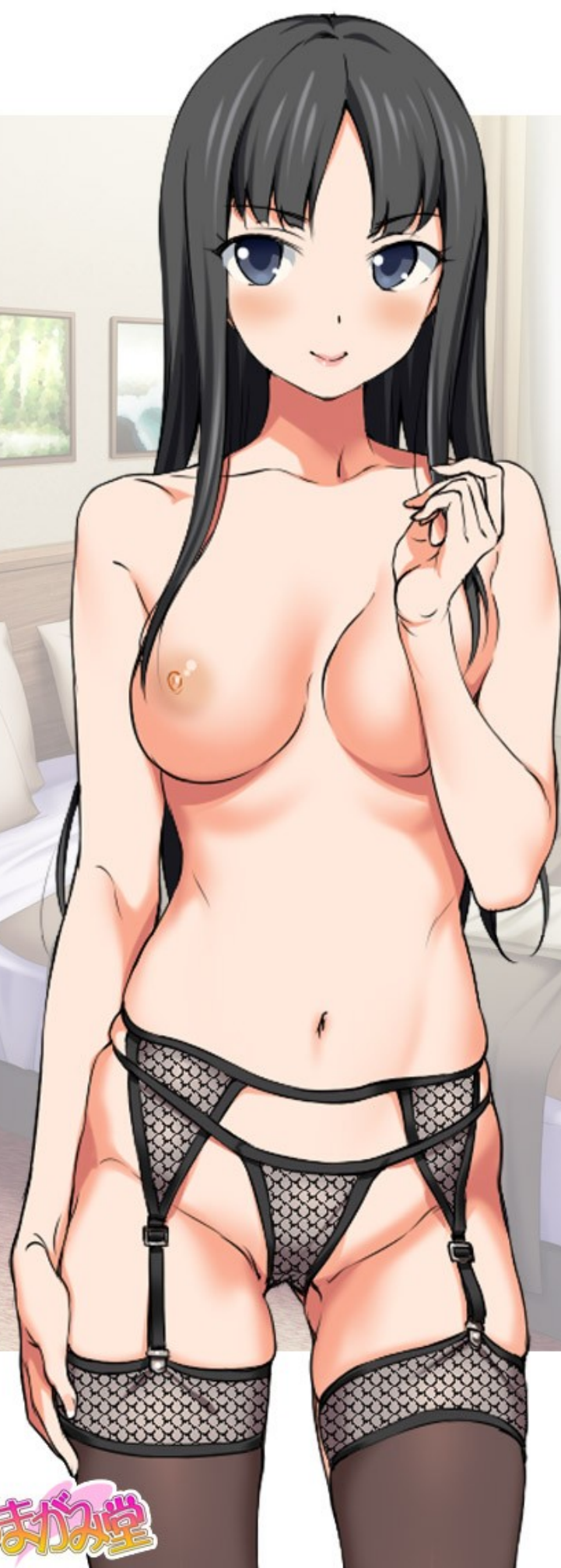


「けれど…セックスに興味がないかと聞かれれば…
決して興味がないわけではないと言おうか…でへ♡
あ…でもこれ 相手がおじさま限定の事なのよ!？」



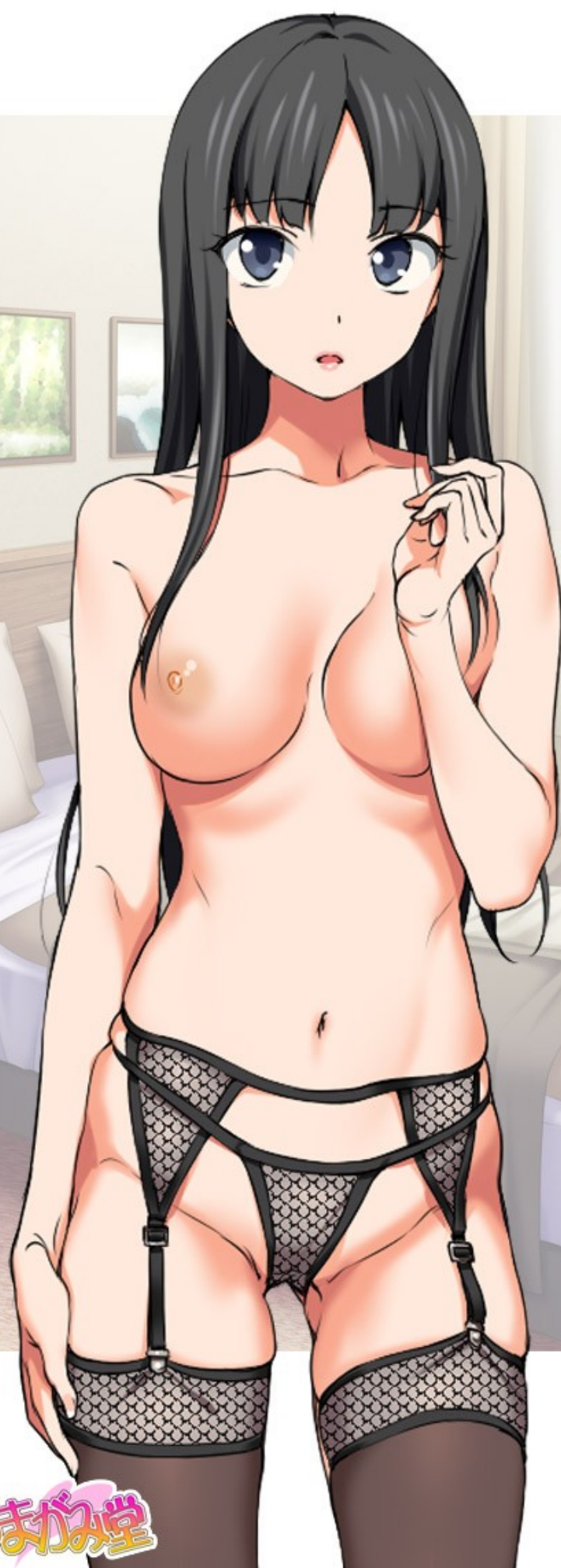
「…そういう事は思っていてもちん中に止めておくつもり…
まあ…以前読んだなにかの本に『恋と愛の違い』について
こう書かれていてね…」

「ふむ…それは興味深いわね
ね…なんて書いてあったの？ おじさま」



「相手の事が気になる気持ち…それが『恋』
そして…相手に何かしてあげたい気持ち…
それが『愛』…だそうだよ」

「相手に何かしてあげたい気持ち…」



「セックスだってそうだ…ある意味『最大級の愛情表現』
…とも言える訳でそれは決して相手から
強要するモノではないだろう?」

「え…えええそつよね…」

「だから…イチゴがこつして俺と愛し合つて
徐々に経験を積んだ上で…口唇で奉仕をしたい
そつ思ふるまでする必要はないよ」

「お…お…おごめも♡」

「判ってくれたかな?」



「ええ…つまり」

おじさまのおチンポで何度も何度も
気持ち良くおマンコを絶頂させられて…♡」

「…んんん？」

「ごく自然に『あつ おチンポ…お掃除しなきや♡』って
無意識におチンポに吸い付くのが当たり前になれ！
…そう言う事ね？」

ワスス!

っ

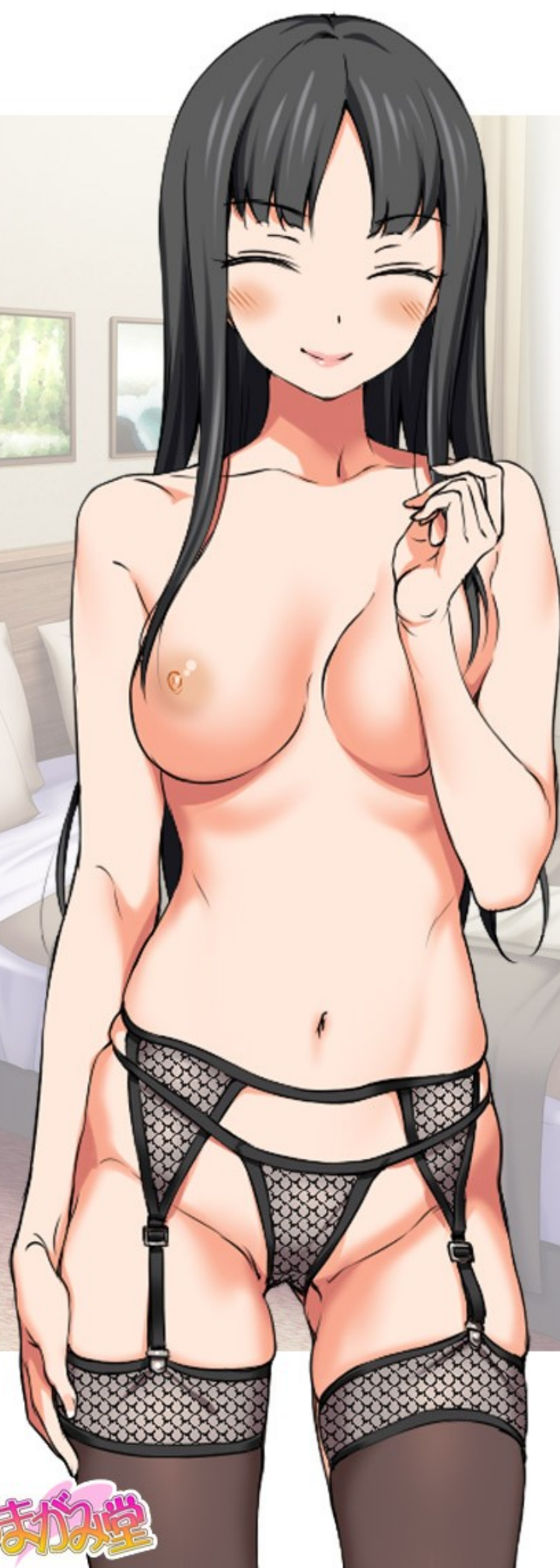
「違うから!？」
はあ…その情報は高務女史ですか？
ガールズトークもたいがいにして——」

「でもね...おじやきも...」

「...ふふ」



「私がおじさまにこの身体を捧げて…
気持ち良く癒されて欲しい…
そんな気持ちだったらずっと前から抱いていたわ♡」



「だから…これは私にとつての『愛』なの
おじさま？ 受け止めてくれるかしら？」

「…もちろん」

こんな睦言を上目使いで聞かされて
拒める男など居るはずがない…

俺はそんなイチゴを抱き寄せて…
ぎゅっと強く抱きしめた



「え・ひあうっ!？」

くちゅう

16th... 7th

寝そべる俺の上に跨がせるとそつと花びらに口付ける
「ちゅっ…もうイチゴのこし濡れ光つてとても綺麗だ…」

「うう」

「言わないで…恥ずかしい…」

くちゅ

ちゅちゅちゅちゅ

ちゅちゅちゅちゅ

「イチゴのだから見たいんだ」
指で広げると蜜で溢れてとろりと零れてゆく

んんう…いつぱい広げられてるう…
あつあ…♡」

くちゅう

トビ
トビ

「イチゴのオマージュ…」

綺麗なサーモンピンクで本当に美味しそうだ」

「やだそんなこと言わないでえ…」

くちゅう

7676

15

そんな風に照れるイチゴもまた愛らしい
俺は肉の扉を指で広げクリトリスを撫でるように弄る

「あっ あひっ!? あ…あっ あ…ソコお♡
すっ…あッ! グリグリしちや ダメえ…♡」

くちゅ

あ、あ♡♡

イチゴは何度も強く体を痙攣させてるように震えた
その度に腰を振って快感から逃れようとする

「んあっ おじさまの…ばかあ♡
そっは…おかしくなっちやうっ♡」

くちゅ

ちゅっ♡

「うっを…!」?

そっ言いつつ…俺のチンポをぎゅっ握りしめながら
亀頭に何度もキスをするイチゴ

くちゅう

ちゅっ♡

あまがみ堂

「…もつとキスしてあげる♡」

くちゅ

ちゅっ♡

「んっ〜」



「私が気持ちいい分…おじさまにもキスしてあげる
私に気持ちいい事をするおじさまなんて…
またイツちやえばいいんだわ♡」

くちゅ

ちゅっ♡

「無茶苦茶な理屈だな…」でも悪くない提案だ
むしろぜひお願いしますと頭を下げたいくらいだ♡

「れろ…ちゅ…♡ちゅ…♡」

くちゅ

ちゅお
くちゅ

「…?!」

まろくちゅるーとげろろろろ

ぴっちりと唇を亀頭に付けるイチゴだったか…

「んく…んっ!?

うう…おじさまの精子…ちよっとなじりて…
喉に絡みつく…けほっ」

くちゅ

ちゅお
くちゅ

「ああ…出したばかりだと精液がまだ尿道
玉袋とチンポの先を通る管に残っている事が多いんだ」

ほら吐き出す——んっ言いかけた途端……



ふう 少しでもあったし…もう飲んでしまったわ♡」

くちゅう

ちゅっ♡

「イチゴ♡」

少し照れたように話す彼女に…感動を覚える

「れろ…ちゅ♡

ちゅ…ん♡ けほ…ちゅ♡」

くちゅ

ちゅお
くちゅ

時折小さく咽せながらイチゴが口淫を続ける
彼女の舌がチンポを蹂躪するように動き回った

「んちゅる…ちゅ…♡ 美味し…くはないのだけど…
ちゅ♡ちゅ♡ 何故…こんなに愛おしいのかしら？
んふふ…不思議♡」

くちゅ

ちゅお
くちゅ

「くっ…イチゴ♡」

俺も負けじとイチゴの敏感なクリトリスを弄った

「あんっ♡おじさまあ…♡あ♡あ♡
…ぞっおダメつて…言つたのに♡」

ぢゅる
ぢゅる♡

ぢゅぽ
くぢゅ

「けど気持ちいいだろ♡っ♡」

「…ぐんぐん(ぐんぐん)」

否定しないところがまた可愛い♡
基本的に嘘とか上手につけない性格だしな

ちゅる
ちゅる♡

ちゅお
くちゅ

「で…でもダメなのお!」

ぢゅる
ぢゅる♡

ぢゅぽ
くぢゅ

「イチゴの口はすっかり濡れて…
ダメじゃないみたいだけどね?」

「うんうん」

イチゴが敏感に感じるその場所を刺激し続ける。
彼女の体がビクビク震えてそのまま果ててしまっているのだ



「んっ♡あ…あ♡気持ちよすぎいで…
おマンコお 変になっちやう♡」

ぢゃる
ぢゃる♡

ぢゃお
くぢゅ

「変でいいんだよ」

透明な汁は徐々に粘り気を帯びつつ
彼女の割れ目や内股を伝って俺に落ちていく。

「あ…んっ♡ 気持ちいい…♡
おじさまの指と舌で 気持ち良くされるの…
すいっ…♡ あ♡ ああ♡」

ちゅる
ちゅる♡

ちゅお
くちゅ

イチゴも無意識にチンポを扱き舐めしゃぶり続ける
彼女の唾液が亀頭や 棹の部分に垂れていく

「んあ♡はあんぐ♡おじちまあ…♡
うんん♡ちゅ♡ちゅ♡」

ぢゅぢゅ♡

ぢゅぢゅ

快感で口淫がぎこちない様子…それでも彼女の舌と唇は的確に気持ちいい場所を刺激してくる

「ちゅ…んあつ♡あ…んんっ♡おじさま…
ああ♡いっぱい気持ちよくなっちやう…♡
あ…頭の中真っ白になっちやうっ♡」

ちゅる
ちゅる♡

ちゅお
くちゅ

「イチゴ…俺もだ…」
イチゴの舌がねっつっつと絡みついてくる
亀頭を強く引っ張るように残滓と唾液を啜られた

「あ…んっ♡ イイ…♡ 気持ちいい…♡
いっぱい感じる…あひっ♡」

ぢゅる
ぢゅる♡

ぢゅぽ
くぢゅ

やがて…俺にもまた清冽な感覚が襲ってきた

「おじさまあ♡

わたし…私…イクのお！ イッちやう…♡
おじさまあ♡ あああ…もおらめ…イクっ♡」

ぢゃる
ぢゃる♡

ぐっぐっ

「俺も…くっ」

イチゴの腰が震えビクビクと痙攣しているそれでも…
懸命にチンポに吸いつくとする彼女が愛しかった

「おじさまあ♡んっ ああ♡ イッちぎゅっ…
らめえっ♡ あ…イク♡ イッくっうっうっ♡」

ぢゅる
ぢゅる♡

おっ
おっ♡

「イチゴ…ッ…」



「んあっ♡あ…あん♡こはは♡」

同時に果て
またイチゴの顔に射精してしまっ
膣口もきゅと締められ
その後物欲しげにパクパクと伸縮を繰り返した



「またこんなにいっぱい…嬉しい♡ちゅっ♡ん…♡」

「ああ…早くお風呂に入って——」
そう思っているのに、手を伸ばさなかったのだから…

ちゅっ♡

「いへん…♡おじさまの味…
すぐ苦いけど…それ以上に愛しいお味ね♡」

「イヤッ!」…♡」



それが2度目だからなのか…
はたまた覚悟していたからなのか…

イチゴは精液を
吐き出すことなく また亀頭を舐め清めた

ちゅお
くちゅ

そんな彼女に俺の股間は萎えるどころなく堅さを増し
そして彼女もまた無意識なのだろう…

物欲しげに腰をくねらせおねだりをするのだった



「今ならあまがみ堂の全作品がFANZA(旧DMM)さんで

半額セール中ですよ」



「この後イチゴっつてば…
『おじさまのザーメンを
美味しくする為よ!』って、
禁酒&禁煙させてたの知ってた?」

ちよつ!?
言わないでよ!

ガーン



あまがみ堂